論　説

2021：変
――百周年の再起動 「紅羊劫」の前奏曲？（1）

夏　　剛

「12.8」感染，「7.20」騒乱，「10.10」蜂起

2020年東京夏季五輪（オリンピック）競技大会は，絶えず「呪われた」と囁かれた。1940年の初主催（9.21～10.6予定）は，日中戦争の負担に耐えず返上した（38.7.15閣議決定）。1980年莫斯科（モスクワ）大会（7.19～8.3）は，ソ連の阿富汗斯坦（アフガニスタン）侵攻（79.12.24～）に抗議して，西側も中国も不参加（ボイコット）した。更に40年後，新型冠状病毒（コロナ・ウイルス）の世界的な感染拡大の所為で，1年延期と成った（2020.3.30合意）。

「好事魔多し」の通り，前の師走にCOVID－19が突発し，地球規模の流行へと発展した。新千年紀（ミレニアム）初頭（2002～03）に人類を戦慄させた重症（サ）急性呼吸器症候（ズ）群の恐怖が，甦って来た。SARS冠状病毒（コロナ・ウイルス）の飛沫感染で，終息宣言（7.5）までに8098人が罹（り）患し，775人が死亡した。歴史は再演の習性が時々有るが，単純な繰り返しではなく様相や規模の変容が多い。

前回の時空倶（とも）に限定的な飛び火を上回って，今回の燎原の野火（やか）は異次元の惨劇を起した。感染者4億，死者576万超（2022.2.9）に至っても，変異種の新出で鎮静の兆しが見えない。COVID－19感染者発症の初認定は，日付（12.8）が丸78年前の真珠湾奇襲と重なる。硝煙無き闇討（やみうち）の猛威は，1世紀前の西班牙（スペイン）風邪（1918～20，約6億人感染，2千数百万人死亡）に迫る。

大雪（たいせつ）の翌日はSARS始発時（11.16，小雪の6日前）に近く，前・今回の広東省佛山市と湖北省武漢市は妙な地縁が有る（北緯/東経差8/1.4度）。長江・黄河（全長6300㌔，5464㌔）も終点が約800㌔離れるが，源が共に青海省西部に在る。SARSは食用野生動物が発生源とされ，17年後も海鮮市場が疑われた。精の付く珍味を求める貪欲が，2回の疫病神を生んだ事か。

「天上九頭鳥，地下湖北佬」（天に九頭鳥，地に湖北野郎），という賛否両義の熟語を思い起す。9つの頭を持つ伝説上の怪鳥は勇猛で抜け目が無い半面，人の魂を食う害も有ると言われる。強（したた）かで我が強く好戦的な湖北人気質の比喩は，元々省都の「武漢佬」を指したのである。「麻」（痺れる辛さ）を好む土地柄に似合い，武漢は地名通り武闘派・熱血漢の産地である。

「文化大革命」の内戦の最中，毛沢東が造反組織の武闘を止める当(べ)く武漢に乗り込んだ。抑圧された軍人集団(グループ)が君側の奸と論戦する為に迎賓館へ闖入し，統帥は度肝を抜かれた。政変と勘違いした彼は空路移動禁止の安全規定に反して，急遽(きょ)軍用機で危地から脱出した。神格化で絶対的権勢を握る領袖の狼狽は，この1幕（1967年「7.20事変」）が空前絶後である。

毛の後継予定者の林彪（党・軍No.2）は，湖北人の反骨精神から盲従に甘んじなかった。彼は強烈な自尊心と孤高な姿勢に由って，要人の中で唯一，毛が強要する自己批判を拒んだ。1971年に政争で敗北した末，妻子と共にソ連へ亡命を敢行し，蒙古(モンゴル)で謎の墜落死を遂げた。「9.13事変」で毛の信望が失墜し，「湖北佬」の玉砕は寡頭統治への一石で歴史を変えた。

毛は国共決裂後の党中央会議（武漢，1927.8.7）で，「槍杆子里出政権」（鉄砲から政権が出る）を唱えた。彼が疑った武漢部隊や林の「兵変」（軍事政変(クーデター)）は，「杯弓蛇影」（杯中の蛇影）に過ぎない。実際に武漢で挙兵した辛亥革命(1911.10.10)は，清王朝を倒し近代史の転換点と成った。共和制に転換した中華民国（翌年1.1発足）は，初心を貫いて「双十」を国慶節とする。

第1次東京五輪（1964.10.10～24）の開会は，中華民国（国交保持中）の建国記念日に当る。東海道新幹線（東京～新大阪）の開業（同10.1）は，中華人民共和国成立15周年に巡り合せた。第2次は2020の名称を維持しつつ翌年に催し，当初の日程も1日前倒しで変更した。図らずも開会（7.23）が中共創建100周年と，閉会が北京五輪（2008.8.8～24）の開幕に重なった。

「12.23」処刑，「11.20」開廷，「3.5」開幕

前年に予定（7.24～8.9）通り行えたなら，長崎原爆被災75周年の節目に終った事と成る。前回の聖火最終走者(ランナー)坂井義則は天与の子で，広島原爆の日（1945.8.6）近くの三次市に生れた。代表選考敗退後の予定者交代の抜擢は，廃墟から復興した栄光の象徴と目された故である。今回の閉幕が2度目の米軍蛮行の日に重ねれば，見事な連環として歴史に残るに違い無い。

極東国際軍事裁判の初日（1946.5.3）は，翌年『日本国憲法』実施日に選ばれた。最終日（1948.11.12）宣告のA級戦犯処刑（7人）は，12月23日0時1分に始まった。皇太子（次代天皇，現上皇）が15歳と成る日に合せた照準は，狙いが透けて見える。猪瀬直樹の喝破（『ジミーの誕生日――アメリカが天皇明仁に刻んだ「死の暗号」』，2009）の通り，警告の暗示である。

米軍主宰の馬尼刺(マニラ)軍事裁判（1945.10.8～47.4.15）でも，露骨な嫌がらせが現れた。本間雅晴中将の処刑は，バターン半島総攻撃発令4周年の同時刻（1946.4.3，0:53）である。神武天皇祭（初代天皇の崩御日，紀元前586.3.11［旧暦］）に当る事で，二重の憎悪が感じ取れる。山下奉文大将は真珠湾攻撃4周年（1945.12.7［米時間］）に死刑判決を受け，翌年（2.23）執行された。

戦後の首都の象徴(シンボル)と成る日本電波塔（東京タワー）は，敗戦・被占領への意趣返しを隠し持つ。公開開始(プレオープン)（1958.12.7）は日曜日で順当に思えるが，真珠湾攻撃17周年の前日である。

完工式・正式公開（同23）は聖誕祭宵祭（クリスマス・イブ）直前の火曜で，A級戦犯集団処刑10周年に当る。後者の吉日（大安）に対する前者の凶日（赤口（しゃっこう））は，一連の怨念の時機（タイミング）設定の性質と通じる。

林彪・江青（等（ら）「4人組」）反革命集団主犯裁判（1980.11.20～81.1.25）も，類似の暗合を含む。初日は江と亡夫毛沢東の結婚記念日（42周年），党首胡耀邦の誕生日（65歳）である。最高人民法院（最高裁）特別法廷の受理（11.10）は，「文革」の起爆剤点火の15年後に成る。1965年の同日に毛の仕掛けた政敵批判の論説が発表され，10年動乱の幕が切って落された。

「文革」中の毛の左・右腕の江・周恩来（総理）は，16歳差ながら誕生日が同じである。その「3.5」は歿後の周生誕80周年（1978）に，全国人民代表大会（国会）閉会日に選ばれた。1995・96年全体会議（総会）の開幕日採用は，周生誕100周年の98年から定例化した。2020年の「疫情」（コロナ禍）に由る延期（5.22～28）の後も，不易の伝統として続いている。

国を支えた賢相（しょう）と国を乱した「女帝」は，同じ誕生日で全人代の節目に亡霊が散ら付く。初登場は又スターリン死去25周年に当り，ソ連の2代目首領の生誕も中国と関る。実際の日（1878.12.18）は100年後，改革・開放を志す第11期党中央第3回総会の開幕日と成った。閉会は公式説（1879.12.21）の99周年の翌日で，10年前は「文革」世代の運命の日である。

毛沢東の号令（1968.12.22）に由り，都市の若者を農村に移住させる運動（キャンペーン）が推進された。異郷で労働を強いられた3千万の「知識青年」には，40数年後の最高指導者習近平が居た。スターリン歿後102日目（6.15）に生れた彼は，中国のスターリンの偏狂で艱難を味わった。後に定住先（陝西省延川県）の寒村を脱出し，実家の北京で不法滞在取締の収容に遭った。

朝鮮戦争（1950.6.25～53.7.27）の終盤に産声（うぶごえ）を上げた事も，習の情念に影響を与えたらしい。彼の党首（総書記）再選（2017.10.25）は，中国人民志願軍入朝参戦（1950）記念日である。国連に於ける中共政権の中国代表権獲得（1970，同日）と共に，抗米・強国志向を窺わせる。金正恩（キムジョンウン）の誕生日（2009.1.8，35歳）を祝う盛大な款待も，「血盟」戦友への偏愛を表した。

「2035」暗号，「10.25」寓意，「73・84」厄年

中澤克二著『習近平帝国の暗号2035』（2018）は，「10.25」から習の秘めた意図を解く。露西亜（ロシア）のソビエト政権樹立（1917.11.7）のユリウス暦（10.25）が，引き合いに出された。革命党の武装蜂起の前日のペテログラード占領も，中共党大会閉幕（10.24）に重ねられた。10月革命100周年に即した深読みは，「捨近求遠」（近きを捨てて遠くに求める）の迂回である。

2035年までに現代化国家の建設を基本的に終える，という習首唱の目標も暗号とされた。超長期の工程表に盛った切りの悪い数字の西暦年は，野望を潜めている様に断じられた。82歳歿まで終身党主席に在位した毛に倣って，習は82歳時の君臨を望むかと推察された。2030でも2040でもない時点が奇抜な連想を誘ったが，党史を紐解けば別の解釈も出来る。

習の党首就任（2012.11.15）前の第 18 回党大会（10.8～14）は，「2 つの百年」を提起した。第 1，建党 100 周年時の「小康（一応の余裕が有る）社会」の全面的達成等を目指す。第 2，建国 100 周年時の社会主義現代化国家の建設完成と中等先進国入りを目指す。14 年前・後の両節目の真ん中に在る 1935 年は，目立たぬものの言わば「第 2.5 の百年」の重みを持つ。

内戦中の 1930 年は軍内粛清・虐殺が起り，翌年の中央機関の壊滅危機と並ぶ暗黒期である。抗日戦争中の 1940 年は陝西北部に中央根拠地を構え，実力温存の為に雌伏に徹した。対して 1935 年は，先ず毛が中央会議（貴州省遵義県，1.15～17）で最高指導部入りした。中央紅軍の長征（江西省瑞金県～陝西呉起鎮，1934.10.17～35.10.19）も，到頭安全圏に辿り着いた。

猪瀬直樹の東京裁判後 A 級戦犯処刑の謎解きは，『昭和 23 年冬の暗号』（2021）と改題した。5 字が重なる報道人（シャーナリスト）中澤の力作は，中国畑が長いだけに 2035 年暗号論が斬新である。一方，毛沢東亡き後の「新長征」の合言葉から，長征勝利 100 周年の意義に想到し得る。第 2 の毛と化しつつある習近平が強く意識する事は，中共の信念と領袖の思考に相応しい。

敵軍や天険の阻害を突破した万里跋渉の完遂は，15 年後の志願軍朝鮮出兵と連環を成す。秘密裡鴨緑江（おうりょっこう）を越えた 6 日後に韓国軍と初交戦し，10.19 ならぬ 25 日が歴史に刻まれた。年輪に日付の軸で並列する長征勝利・朝鮮出征は，「10.25」「2035」暗号の根底と思える。習は毛が頂上（トップ）級の地位に上った 100 周年まで，「核心」に留（とど）まる願望に駆けられかねない。

2022 年秋の党大会・新中央総会の期日も興味を引くが，習の 3 選は最早（もはや）確実と見られる。鄧小平時代以来の 2 期限定の慣例を破るのは，5 年後の党大会の時期とも関係が有ろう。彼は建党 100 周年式典（2021.7.1）で，開国大典（1949.10.1）の毛に勝る威勢を見せた。「21 大」直前の建軍 100 周年（2027.8.1）も絶好の晴れ舞台で，閲兵の主（ぬし）は他者に譲れまい。

「事不過三」（事は 3 度を過（こ）さぬ。仏の顔も三度）と言う中国人は，再三以上の再四には厳しい。68 歳引退の規矩（しきたり）を無視して 3 期目を実らせても，4 選（74～79 歳在任）は流石（さすが）に難しい。俗諺（げん）に曰く，「七十三，八十四，閻王不叫自己去」（73，84，閻魔王が呼ばなくても自分で行く）。バイデン（1942.11.20 生）米大統領の高齢（同 78～82 歳）で正当化しても，老害が忌避される。

専権の猛者（もさ）プーチン（1952.10.7 生）は，職位・任期変更の裏技で長期執政を行（おこな）って来た。第 2 代露大統領（2 期，2000～08）を務めた後，米と同じ連続 3 選禁止の憲法規定で退（しりぞ）いた。空（す）かさず首相に転じ実質的な最高指導者であり続け，憲法改正で大統領任期を 6 年とした。再登板の 2 期満了（2024）後も，国家評議会の権限強化で事実上の終身支配が図られる。

「100 年」節目，「11.8～14」会期，「11.15」当選

欲張りを戒める中国の格言に，「魚与熊掌不可兼得」（魚と熊掌（ゆう）は兼ねて得る可（べ）からず）と有る。孟子は何（いず）れも我が欲（ほっ）する所だとしつつ，「舎魚而取熊掌」（魚を捨てて熊掌を取る）と勧めた。

中国では「鮮」（旨い）の字形通り魚は羊と並ぶ美味で，熊掌は古来最高の美味とされる。儒教の亜聖の取捨は中国人の肉食系･珍味嗜好を物語るが，両方占有の貪欲も可(よ)く見られる。

プーチン出生の恰(ちょう)度34年後に歿した劉伯承元帥は，肉の重層的な楽しみ方を薦めた。先ず1切れを口に銜え，次に2つ目を箸で挟み，更に皿の中の3つ目を睨む，と言う。第2次内戦（1946～49）・政権奪取の功臣の強欲は，第2（中原）野戦軍の相棒(あいぼう)鄧小平に通じる。「一箭双鵰」（一石二鳥）の一挙両得を超えて，3兎を逐(お)って3兎を得る可能性も否めない。

「上に政策有り，下に対策有る」と言う様に，中国人は法規の網を潜る事に長けている。例えば，接待倹約令の「三菜一湯（汁）」の枠内で，超大皿(おおざら)に数品を盛り合せて1品とする。習の党首去就に関しても，禁則破りの謗(そし)りを免れた上で最高位に留まる抜け道が有る。譬えて言うなら，肉を食べながら魚を捨てず熊掌と兼ねて得る様な奥の手が繰り出せよう。

毛沢東は1938年11月から張聞天総書記を差し置いて，最高指導者の実権を握った。彼の為に復位した党主席は任期の制限が無く，その代は終身と成った（1943.3.20～76.9.9）。後任の華国鋒（1976.10.7～81.6.29）と胡耀邦（～82.9.12）の後，建党時の総書記に移行した。以降は前任更迭に伴う変則の例として，江沢民（1989.6.24～2002.11.15）の2.5期が最も長い。

総書記3選が不評を招くと懸念すれば，抜本的な対策として主席制に戻すのも一法である。習の国家主席再任（2018.3.17）の6日前の憲法改正で，任期制限（2期，10年）が撤廃された。彼の個人名を冠する新時代の思想も，党規約の改正（2017.10.24）で権威付けられた。党規・国法の大本(おおもと)も簡単に弄(いじ)る力業を見れば，党首の職名を変える事も不可能ではない。

国家主席・党 / 国家中央軍事委員会主席と統一すると言えば，尤(もっと)もらしい名分に聞える。建国後初の党大会（「8大」，1956.9.15～27）で新設した名誉主席も，都合好く復活し得よう。毛の次期（67歳時の1961年［予定］～）引退を念頭に置いた職位は，「文革」中に廃止した。習は主席を経て前人未到の栄光と引き換えに勇退すれば，「溢値(プレミアム)」（余禄付き）帰着に成ろう。

毛の最終職務には，中国人民政治協商会議（中共主導の超党派政治助言機関）名誉主席が有る。宋慶齢（孫文夫人）も他界（1981.5.29）の直前（5.16），国家副主席から名誉主席に昇格された。西洋 / 日本の「罪 / 恥の文化」と違う「名の文化」に由り，この種の称号は最高の礼遇である。習は「文革」の誤りが有る毛より無謬(びゅう)性を称(とな)え易く，毛に無いこの名誉職も比肩を超える。

習時代の党大会から，元党首（江沢民･胡錦涛）が議長席で彼の両側に坐る様と成った。穿った見方では，自身引退後の同じ厚遇を確保する為の恩義の先払いとも取れる。抗日戦争勃発（1937.7.7）100周年まで続く4期目が無理でも，終身名誉称号で十分に輝ける。個人の「百年」（天寿の限りを尽す終生）の計を案じれば，功名成就の最大化の有力な選択肢に入ろう。

2002年の「16大」と12年の「18大」は，党大会史上初の同じ日程（11.8～14）で開かれた。胡錦涛・習近平の総書記1期目の起点も，同じ新中央委員会組成の翌日（11.15）である。政争欲が薄い能吏型の胡は，江沢民の退任後の軍委主席留任（～2004.9.19）を我慢した。対

照的に要人の父親に勝る辣腕を持つ習は，就任前から実権掌握の布石を遠慮無く打った。

「11.10」作戦，「11.14」毒殺，「8.20」処罰

毛沢東は「文革」前哨戦の初日に，「双箭斉発」（2 本の矢，一斉発射）の作戦を展開した。姚文元（文芸評論家，後「4 人組」成員）の批判論文の発表と共に，君側の人事異動を行った。党務の枢要に当る党中央辧（べん）公庁主任（事務総長）の更迭で，楊尚昆（1948.5 以来）が失脚した。腹心の汪東興（中央警備局長，少将）を後釜に据える事で，全権独攬への基礎固めが速まった。

習の第 1 弾も党大会前の異例の中辧主任交代で，令計劃を統一戦線工作部長に転出させた。胡の側近に替（かわ）って就任した栗戦書は，習の地方勤務時代の親友で今や序列 3 位である。政敵排除（令は後に無期懲役）の伏線を敷く当日（9.1）は，巡り巡って再婚 25 周年に当る。妻彭麗媛（国民的歌姫）の誕生日（1962.11.20）は，毛・江（元女優）の結婚記念日と重なる。

改革・開放後第 4・5 代総書記当選の 11 月 15 日は，権力移行期の忌々しい事件に現れた。「18 大」閉会の 1 年前（2011.11.14），重慶で英国の実業家（1970.10.20 生）が毒殺された。現場で下手人を指揮した主犯谷開来は，薄熙来（中央政治局委員・同市党委書記）の妻である。翌日の死体発見に由り「11.15 案件」と命名されたが，谷はこの日に満 53 歳と成った。

毛沢東追悼の公式映画に谷の琵琶演奏が流れた事は，薄の毛崇拝・革命歌推奨と暗合する。彼等は皮肉にも，毛の生誕 66 周年（1959.12.26）に生れた側近の刺し違えで破滅した。その王立軍（市公安局長→副市長）は薄の不興を買った事に立腹し，犯罪の暴露に踏み切った。成都（四川省都）の米総領事館への亡命（2012.2.6）は，41 年前の林彪事変と二重映しに成る。

未遂の脱走で事件が発覚し，4 月 10 日に薄の政治局委員・中央委員停職と谷の逮捕が発表された。谷は死刑（執行猶予 2 年）判決（8.20）を食（くら）ったが，39 年前の同日も歴史に残る厳罰が有った。「10 大」（1973.8.24～28）前の清算で，林彪一味 8 人が党籍を永久に剥奪された。9 年後に名誉が回復した李雪峰（元河北省首長）は，薄の前妻丹宇（1950 年生）の父親である。

温家宝総理が全人代閉幕日（3.14）に重慶市委の責任者を叩き，翌日に薄の同職が解かれた。9 年前の 14 日に歿した李の公私両面の怨念は，屈折した形で薄に付き纏った様である。薄は収賄・汚職罪等で無期懲役を言い渡され（9.22），党籍剥奪・公職追放と為った（同 28）。囚われ先の要人用の公安部（省）秦城監獄は，ソ連の援助で 1960 年 3 月 15 日に落成した。

腐敗を摘発された徐才厚（前軍委副主席）は，2015 年「3.15」に監禁先の病院で死んだ。習の党首再選の 4 年前に当る薄の判決確定（2013.10.25）も，政敵粛清に現れた天数に有る。共和国と同齢（1949.7.3 生）の薄は野心膨張の末，長老の父と違って人生を全う出来なかった。中央指導部（政治局）成員の妻が殺人犯に成り下がった事は，党史上未曾有の汚点と成った。

「6.15」生誕，「6.25」開戦，「12.26」連環

昨今『人民日報』（中央機関紙）は習の広報が溢れるが，彼の出生は創刊5周年の日に当る。『毛沢東伝（1949－1976）』（中共中央文献研究室編，2003）では，49年「6.15」が冒頭に出る。開国大典の叙述の導入部として，毛の新政治協商会議準備会議での講演が引かれる。真新しい強盛な人民共和国の迅速な建設を予言した名文は，習の「中国の夢」の祖形を感じさせる。

習出生の当日，毛は国家の工業化と農業・手工業・資本主義工商業への改造を提起した。新民主主義の構想を止揚し，改造を通じて社会主義へ移行する過渡期の総路線と成る。官製伝記で極めて重要な文献とする講話の23年後，毛は後継者・側近等に遺訓を垂らした。習の「紅色基因」（赤い遺伝子（DNA））と毛への傾倒は，由緒有る誕生日にも因縁が孕まれている。

娘明沢は朝鮮戦争勃発42周年時（1992.6.25）に生れ，父の「10.25」暗号と一部通じる。「沢」から毛沢東と江沢民，胡耀邦と胡錦涛，鄧小平と習近平の姓・名の親縁性を連想する。毛と胡錦涛の誕生日（1893.12.26，1942.12.25）の隣接も，党首間の天数の連環に挙げられる。一方，華国鋒の死去（2008.8.20）は盟友（党首時の副主席）汪東興（15.8.21）と日付が続く。

毛を継ぐ華と懐刀の汪はその死の27日後（1976.10.6），宮廷政変で「4人組」を逮捕した。4人中最高位の王洪文（元副主席，1935.12生）は，無期懲役服役中に病歿した（92.8.3）。江青（元政治局委員）は死刑（執行猶予2年）→無期懲役に減刑後，絶望の自殺をした（1991.5.14）。其々自ら指揮した上海最大の武闘の25周年の前日，「文革」発動25周年の前々日に当る。

中共と同齢（1921年生）の華国鋒の誕生日（2.16）は，13歳年長の薄一波（2.17）と隣り合う。薄は中央顧問委員会副主任として，胡耀邦（華に次ぐ党首）査問・更迭の急先鋒を為した。胡辞任（政治局拡大会議，1987.1.16）20周年の前日，彼は罰が当る様に99歳未満で逝（い）った。初政治局入り（委員候補，1955.9.28）の丸57年後，次男熙来が異次元の悪で党に除名させた。

総理を経て後任党首を務めた趙紫陽は，生れ（1919.10.17）が長征開始の15年前に当る。彼は翌々年に大衆の民主化運動への弾圧に反対した為，解任（6.23）・終生軟禁にされた。歿（2005.1.17）は遵義会議閉幕70周年に巡り合せ，胡辞任・薄死去は会議の初・中日に当る。52年を隔てた1月中旬の党首解任は，大寒（1.20/21）前の時節に似合う冷厳な政変である。

初代党首陳独秀（1879.10.8～1942.5.27）は，政見の相違等に由って除籍された（29.11.15）。次の瞿秋白（1899.1.29～1935.6.18）は病気で長征に加われず，国民党に捕まって処刑された。3代目の向忠発（1879～1933.6.24）は敵手に落ちた翌々日，裏切った甲斐も無く銃殺された。後任の李立三（1899.11.18～1967.6.22）はその逮捕の34年後，「文革」の苦に耐えず自殺した。

秦邦憲（向処刑の日に満26歳）は党首歴3年強で，政治局拡大会議（遵義）で下ろされた。次期中央委員当選（1945.6.9，得票最少）後，翌年「4.8」事故で他の要人と共に墜落死した。代りの張聞天（1900.8.30生）は毛沢東に禅譲したが，外務次官在任中59年に毛に倒された。

失意の病歿（1976.7.1）は後に趙紫陽と同じく，党機関紙の極短い報道に要職歴が出なかった。

瞿・向・李の命日と趙の解任は6月後半に集中し，張の死は建党55周年記念日に当る。共に失脚した彭徳懐（国防相）・黄克誠（総参謀長）も誕生日に中共所縁が見られ，初代志願軍司令の彭（1898.10.24～1974.11.29）は入朝参戦記念日と隣接し，黄（1902.10.1～86.12.28）は国慶節と重なる。悲しい事に，直後の建国10周年閲兵式は林彪が主宰し彼等の出番が無い。

「彭黄張周反党集団」の周小舟（湖南省委第一書記，1912.11.11生）は，遂に自決した（66.12.26）。「文革」初年の毛沢東の誕生日（73歳）を選んだのは，旧主への鬱憤の発露と想像される。毛の秘書田家英（1922.1.4～66.5.23）も中央辦公庁副主任の停職後，毛の図書室で縊死した。鄧拓（建国初の『人民日報』社長兼編集長，1912.2.26～66.5.18）も，「文革」の3日目に自裁した。

「8.18」盛会，「9.13」事変，「12.5」応報

「“文革”旗手」江青の四半世紀後の自殺も，「文革」発動の中央通達の「5.16」に近い。毛の元妻（江は次の次）楊開慧（1901.11.6～30.11.14）は，湖南軍閥の命で銃殺された。逮捕の日（10.24）8歳と成った長男毛岸英は，同じ誕生日の彭徳懐の志願軍司令部に勤めた。米軍に由る爆死（1950.11.25）で毛の後裔が毀損されたが，彼と母親の名残が党大会閉幕日に遺る。

24年後の同月29日，彭は癌の治療も放置する虐待の末，窓を塞がれた部屋で息絶えた。陶鋳（「文革」初4位，1908.1.16生）も失脚後の監禁中，5年前の翌日（69.11.30）に世を去った。毛に後継を取り消された劉少奇（国家主席）も，陶の18日前に監禁先で凄惨な最期を送った。党籍永久剥奪・公職追放の決定（1968.10.31）は，意地悪にも古稀の日（11.24）に通告された。

彭・陶の命日に続く日は，「建軍の父」朱徳（軍総司令，1886.12.1～1976.7.6）の誕生日である。元帥（1955.9.27授与）1・2位の朱・彭に次ぐ林彪も，同月の初頭（07.12.5）に生れた。4位の劉伯承（1892.12.4～1986.10.7）の出生は，林の15年と1日前に当る。「独眼龍」（片目失明）劉の逝去は別の「史縁」で，華国鋒の党・軍委主席就任10周年（1986.10.7）と為る。

華は「11大」初日（1977.8.12）の政治報告で，「文革」の勝利裡の終結を宣言した。彼の失脚後その見解は「文革」否定と共に葬られ，「4人組」逮捕こそが終焉とされる。閉会（8.18）の11年前に天安門広場で紅衛兵集会が開かれ，100万人が毛の臨席に熱狂した。毛が超絶の栄光を浴びた当日と「4人組」逮捕の中間点（1971.9.12）に，林彪事変が起きて了った。

ソ共「20大」（1956.2.14～25）の最終日，フルシチョフ党首がスターリン批判の嚆矢を放った。毛は死後を案じて政敵粛清を進めたが，当人も政変（臨時中央総会，1964.10.14）で辞任した。元党・政首領（兼首相）は年金生活の身で，波乱の生涯（1894.4.17～1971.9.11）を閉じた。運命の悪戯で翌日に林がソ連へ飛ぶ決断を下し，13日未明の強行が謎の変死に終った。

「自信人生二百年，会当水撃三千里」（自ら人生は二百年と信じ，会に水を撃つこと三千里なる当

し)。若い頃の詩で斯(か)く豪語した毛は水泳を好み，「文革」初に長江横断で精力絶倫を顕示した。72歳の壮挙（武漢，1966.7.16）の8年余り後（74.12.5），水泳中に老衰を痛感して諦めた。その断念は林生誕67周年に当り，傍の警備隊長陳長江は林彪事変の前日に40歳と成った。

林の幽霊は12年後の同日，中国科学技術大学（安徽省都合肥）の学生示威(デモ)の陰に彷徨(さまよ)った。全国に波及した「学潮」（学生運動）は「資産階級(ブルジョア)自由化」と断罪され，胡耀邦失脚を招いた。震源地の「元凶」方励之副学長（天体物理学者）は，胡辞任の翌日（1.17）党から除名された。彼も安全確保の為の窮極の脱出術を以て，「89.6.4」惨劇の翌日に米大使館に逃げ込んだ。

「中国のサハロフ」は米国の支援の下で，翌年に出国した（朝鮮戦争勃発40周年の6.25）。件(くだり)の核物理学者（1921.5.21～89.12.14）は，異端の民主化志向でノーベル平和賞を受けた（75）。ソ連の「水爆の父」は流刑（1980～86）解除後，「再構築(ペレストロイカ)の父」と称される活躍が加速した。対して方は定住先の米国で教鞭を執り，内外の影響力を失った儘に客死した（2012.4.6）。

1970年ノーベル文学賞受賞者ソルジェニーツィンも，ソ連の体制を告発する作家である。収容所体験を含む受難の人生（1918.12.11～2008.8.3）の内，20年（74～94）国外に追放された。「中国のソルジェニーツィン」劉賓雁は「反右闘争」（1957）で，毛の指示で党籍を奪われた。名誉回復・中国作家協会副主席就任後，鄧小平の逆鱗に触れて再び除名された（1987.1.23）。

林彪・江青一味裁判終結の1月25日は，「林・孔子批判1.25大会」（1974）を連想させる。江は中央・国家機関1万人集会で周恩来を責め，人々の怒りを買って罪状と成った。7年後の極左派厳罰と逆の更に6年後の左旋回で劉は躓(つまず)き，翌年に渡米し「6.4」後に亡命した。帰国できず異郷の鬼と化した（2005.12.5）が，蒙古に遺体を埋めた林の生誕98周年に当る。

「2.19」怒号，「4.15」急逝，「5.15」逆襲

1987年初（1.10～15）の中央指導部政治生活（反省）会で，胡耀邦は非情に吊し上げられた。並行した識者への党籍剥奪は，13日の王若望（作家，『上海文芸』誌副編集長）が第1号である。彼は「6.4」後に政権転覆の罪で14ヵ月投獄され，1992年に訪問学者として渡米した。中国民主党の創建・主席就任（1995.6，紐育(ニューヨーク)）の後，回天の術も無く病死した（99.12.19）。

王は24節気中第1の立春（1918.2.4）に生れ，劉・方の誕生日（25.2.7，36.2.12）も近い。生贄(いけにえ)3者の除名を厳命した鄧は10年後，雨水（同第2，1997.2.19）の節目に天に召された。30年前の「2.19」は毛沢東の「2月逆流」平定に由り，「文革」史の重要な1日に数え得る。3日前に江青等への不満をぶつけた要人に対して，毛は異様な怒気で叱咤(しった)し即座に黙らせた。

停職を強いられた3人の首位は，陳毅（副総理・外相，元帥6位，1901.8.26～72.1.6）である。徐向前（同8位，1901.11.8～90.9.21）・譚震林（副総理，1902.4.24～83.9.30）は，彼と年齢が近い。類似の羅栄桓（同7位，1902.11.26～63.12.16）は，陳と共に葬儀に建国後の毛が例外的に出た。

もう1回は，朝鮮参戦を注視する緊張で歿した任弼時（党5位，1904.6.13～50.10.27）である。

「9.13」後の再建を図る毛は古参幹部を籠絡する為，陳の追悼会（1.10）に駆け付けた。林彪の裏切りで心身が不調した彼は，薄着での臨時外出が祟って後に危篤に陥った（2.12）。強靭な生命力で9日後ニクソン米大統領と会見したが，立春後の変調多発が気に掛る。日中国交正常化も有る同年の外相姫鵬飛（1910.2.2～2000.2.10）は，後この時節に自殺した。

8期12中全会（1968.10.13～31）の劉少奇処分・閉幕は，蒋介石の81歳の誕生日に当る。時の指導部内に彼の国民党総裁より年長なのは，1歳上の朱徳と董必武（国家副主席）である。董は周恩来・江青の恰度12・28年前（1886.3.5）に生れ，蒋の3日前（1975.4.2）に他界した。蒋の命日と成る清明は墓参りの習俗から，翌年に各地で故総理を悼む大衆運動が勃発した。

民兵が棍棒で市民を鎮圧する天安門事件の後，国民の怨嗟が強まり「文革」の破局を速めた。13年後に胡耀邦の心筋梗塞・急逝（4.8・15）で，大衆追悼→当局弾圧の悲劇が再び現れた。政治局会議で倒れた日は，1946年の同日の元党首等が米軍機墜落で散った不吉を帯びる。不意の死は巡り巡って，3歳上の金日成（北朝鮮の建国の父）の77歳の誕生日に当る。

民主化高揚の中で趙紫陽は訪朝し，「動乱」糾弾の『人民日報』「4.26」社説を阻めなかった。人民軍創建57周年（4.25）に合せた外遊は，朝鮮戦争に続いて「血盟」絡みの厄介を齎した。10年後の「4.25」，法輪功学習者1万人が中南海（党中央・国務院所在地）の周りで請願した。抑圧への抗議が活動禁止（7.22）に遭い，気功修練団体は「邪教」指定で霧散した。

ゴルバチョフ（1931.3.2生，85.3.11ソ共書記長就任）の訪中で，民主化運動が気炎を上げた。再構築・情報公開を掲げる改革派党首（58）は，鄧小平（84）の硬直・専制と比較された。初日（5.15）に天安門広場が学生に占拠された為，歓迎式典の場所変更等を余儀無くされた。趙紫陽は鄧の最終決定権堅持を会見で披露し，陰の首領への批判を惹起する罪状と成った。

32年前の同日，毛沢東は党の整風で体制を批判する向きへ反撃す当く論説を書き始めた。「百花斉放，百家争鳴」の提倡（1956.4.25）から豹変し，55万人超の「右派」冤罪を作った。日本の「55年体制」（保守･革新の2大政党制）に対して，毛独裁の「57年体制」が形成した。「反右闘争」は『人民日報』「6.8」社説で始まり，号砲発射の日は別の疑獄の結末に繋がる。

「5.13」断罪，「6.8」悲喜，「6.1」点火

1955年5月13日の同紙に，毛主導の「胡風反党集団」批判の第1弾が出た。胡（文芸理論家）は文芸に対する党の指導への不服が災いし，毛の命令で逮捕された（5.16）。憲法（前年9.20制定）第37条所定の全人代代表（代議士）不逮捕特権は，超法規の彼に無視された。追認手続（全人代常務委員会に由る代表資格剥奪，5.18）後の投獄も，裁判が無い儘10年続いた。

懲役14年（1965.11.26判決）の監外執行（3年強の予定）中，再び収監された（67.11）。刑期

満了後は理不尽にも無期懲役と成り（1970.1），精神錯乱の状態で無罪放免（79.1）を迎えた。
被害者を多く出した20世紀最大の文字獄（言論弾圧）は，「反右」粛清の予備演習と成った。
胡の悲惨な人生（1902.11.2～85.6.8）の終点は，不幸の連鎖で「反右」開始と日が同じである。

胡が楯突いた周揚（党中央宣伝部副部長）は，文化人を多く圧制し「文芸沙皇」と呼ばれた。
異名（帝政時代の露西亜の君主の称号）と関連して，10月革命の10年前（1907.11.7）に生れた。
毛の文芸界「総管」（大番頭）も主に切られ，胡の後を追って囚われた（秦城監獄，1967～75）。
復職後は胡等に謝罪し守旧派と訣別したが，胡死去の月に植物状態に陥った（1989.7.31 歿）。

毛の指示で胡を逮捕した羅瑞卿（公安相）も，主の警備を司る忠臣ながら捨てられた。軍
委秘書長兼総参謀長（黄克誠の後任）・副総理に昇任（1959）後，林彪との軋轢で失脚した（65）。
飛び降り自殺未遂（1966.3.18）後に秦城監獄で7年を過し，毛歿の翌年軍委秘書長に復帰した。
西独で下肢損傷を治す人工関節置換術の成功後，心臓発作で帰らぬ人と成った（1978.8.3）。

彼を含む「彭羅陸楊反党集団」は頭数も頭の姓も，前の「彭黄張周反党集団」と通じる。
彭真（中央常務書記・北京党政首長，1902.10.12～97.4.26）は，復活後に全人代委員長を務めた。
大将（元帥と共に「文革」後廃止）10人中3・8位の黄・羅は，軍の重要性を現す2番である。
羅は中央書記解任8日後に還暦を迎え，翌「6.1」『人民日報』社説が「文革」を点火した。

次の陸定一（副総理兼文化相等）は，史上最長の中宣部長（1944～52，54～66）である。「胡
風反革命集団専案小組（案件小委員会）」責任者の彼は，同じ秦城監獄に入れられた（8年）。
73歳に成る前日の名誉回復（1979.6.8）は，胡は死（恰度6年後）まで完全には出来なかった。
円満他界（全国政協副主席在任中の1996.5.9）の陸は，同じ「第3の男」張聞天より幸せである。

歴代の中宣部長には後か現役の党首が4人居り，瞿秋白・李立三と胡耀邦の間が張である。
24人中の陸・王忍之（1987～92）と後任の丁関根（～2002）は，江蘇省無錫市に生れた。年
齢差が有る3人（関・王は1929.9，33.9生）の同郷は，通算37年弱も同要職を担当した。張（上
海出身）は流放先（広東肇慶市）からの帰京を毛に許されず，移住先の無錫で逝去した。

陸の妻厳慰氷は故郷無錫の高い文化の香りと無縁の行状で，他者と自家に害を及ぼした。
林彪夫人葉群（1917.12.1生）への敵視から，葉と子女に怪文書を数十通も送った（60～66）。
葉所産の2児は林の血を引かず，娘林立衡（1944.8.31生）は劉少奇の子に似ていると書いた。
変名や投函地点で劉の妻王光美へ疑惑を向わせる等，長年の妄想症を超えた悪意が際立つ。

陸は厳の犯行発覚・拘束（1966.4.28）後，政治局拡大会議（5.4～26）で批判・解任された。
厳は秦城監獄の未判決囚（1967～78）から復帰後，落成26周年に病歿した（18～86.3.15）。葉
は娘の密告で中央にばれた海外逃亡の途中，夫・息子林立果（1945.12.23生）と共に散った。
王も秦城監獄で略同じ歳月を過したが，厳より17歳長い享年を得た（1921.9.26～2006.10.13）。

「5.16」嚆矢，「5.20」戒厳，「7.15」解除

江青も 1954 年「匿名信（書簡）」で昔の醜聞を暴かれ，羅瑞卿の指揮で捜査が行われた。7 年後に林伯渠（きょ）（開国大典を司会した元老）の妻朱明が浮上し，自供後に直ぐ自殺した（歿年 42）。夫（1886.3.20～1960.5.29）は政治局委員なので，委員候補の妻厳の行為より重い側面も有る。両事件の数十年後の薄熙来夫人に由る外国人殺害は，百倍も千倍も酷く罪万死に値する。

厳は買物の際に葉と口論した事を釈明する為，自筆文書を提出し発覚の契機と成った。同じく筆跡を偽装しなかった朱は，亡夫関連の陳情書で中辦主任楊尚昆に見破られた。楊は 4 年後の左遷（肇慶→山西省臨汾地区）を経て，「彭羅陸楊反党集団」の末席として完全に失脚した。「彭黄張周」の内 3 人が「文革」中に落命したが，2 組目の敗者 4 人は全て生き延びた。

楊は国家主席兼軍委副主席（2 人制）在任中，第 2 次天安門事件で重要な働きを発揮した。鄧小平・ゴルバチョフの「5.16」会見に由り，30 年来の中ソ対立は遂に和解が実現した。「文革」勃発 23 周年の当日の政治局常委会で，大衆運動への対応を巡る議論が割れた。ソ共党首帰国の 17 日の拡大会議で，鄧（軍委主席）は楊（同じ非常委）の支持で鎮圧を決めた。

19 日夜，党中央・国務院招集の首都党政軍幹部大会で北京部分地区戒厳令が布告された。発動を拒否した趙紫陽は体調不良を理由に欠席し，彼に割り当てられた講話は楊が行った。鄧は実施の責任者として，常委の李鵬（総理）・喬石（中央紀律検査委員会書記）と楊を指名した。趙は当日未明に広場で断食示威（ハンガー・ストライキ）中の学生を見舞った後，公衆の場から姿を消された。

北京戒厳令の発令・実施（翌日）は，台湾戒厳令（同＝ 1949.5.19，20）の丸 40 年後である。台湾戒厳は世界最長の 38 年続いたが，解除（1987.7.15）後の民主化は 10 年も掛らなかった。中共治下の初戒厳令（1989.3.8，西藏（チベット）自治区首府拉薩（サラ））は，日付が先行の台湾の年数と重なる。国共の一卵性双生児めく特質も指摘されるが，台湾戒厳時代には大規模な武力鎮圧が無い。

国民党は「2.28 事件」（1947，台北）を皮切りに，台湾で長年「白色恐怖（しろいテロ）」を行い続けた。中華民国初代総統（蔣介石）就任（1948.5.20）の 1 周年が，台湾全域戒厳令の初日と重なった。副総統の途中昇格（第 1 号は蔣介石死後の厳家淦（かん））を除いて，「5.20」は今も恒例就任日と成る。直近（2020）に至る 70 年余り，大陸撤退後の本拠地の暗い歴史の烙印が押された儘である。

毛沢東は有名な「5.20」声明（1970）で，印度支那（インドシナ）を侵略する米国と走狗に強く譴責した。翌日に天安門広場で 50 万人の擁護・声援集会が催され，毛の傍で林彪が全文を読み上げた。病体の彼は「巴勒斯坦（Bālèsītǎn）」（パレスチナ）→巴基斯坦（jī）（巴基斯坦（バキスタン））等と，幾つか読み間違いをした。翌年の死の旅で乗った特別機は，その巴基斯坦（バキスタン）経由で輸入した英国製「三叉戟（トライデント）」である。

建国後初の「5.20」（1950）生れの魏京生（北京の労働者）は，後に民主化運動の先駆と成った。彼は工業・農業・科学技術・国防の現代化（国策）に，第 5 の民主を加えようと唱えた。壁新聞で打ち出した日（1978.12.5）は，毛の独裁に反旗を翻した林彪の生誕 71 周年に当る。8 年後同日の前出「学潮」勃発も，モーツァルト（墺太利（オーストリア）の音楽家）歿 195 周年と関係が無い。

魏等の「北京之(の)春」の祖形は,「布拉格(プラハ)の春」（チェコ - スロバキアの自由･民主化運動）である。ドブチェク（1921.11.27 生）共産党第 1 書記就任（68.1.5）後，旧弊打破の改革が断行された。「人間の顔をした社会主義」を目指して，中央総会（4.1 ～ 5）で『行動綱領』が採択された。検閲廃止の翌日（6.27),外国の軍事介入を懸念する著名人連名の『2 千語宣言』が世に出た。

「1.18」検挙,「2.17」侵攻,「10.5」決断

ソ連と衛星国の侵攻を想定した大衆行動への呼び掛けは，ソ連で「反革命」と睨まれた。友好協力相互援助条約機構軍の国境突破･全土制圧（8.20～21）で，情勢が一挙に逆転した。党指導部が拘束された中の第 14 回臨時党大会（22）も，狂瀾を既倒に廻らせなかった。党首は交代（1969.4.17）・党籍剥奪（70.6.26）を経て，10 月革命 75 周年時（92.11.7）に歿した。

チェコ - スロバキア共産党の創建（1921.5.16）は,「文革」発動の丸 45 年前に巡り合せる。第 1 回党大会の開幕は，上記の条約機構の設立（波蘭(ポーランド)首都華沙(ワルシャワ)，1955.5.14）と日付が重なる。件(くだり)の宣言の起草者バツリーク（作家･報道人）は，中共建党 5 周年の日（1926.7.23）に生れた。彼は作品の発表を制限された（1989 年解除）が，監禁はされず最後に大往生した（2015.6.6)。

1978 年,『中国青年』誌復刊号（9.11）が 76 年「4.5 運動」詩鈔の掲載等で発禁された。11 月 15 日にそれが北京西単で貼り出され，壁新聞を掲げる「民主墻（壁)」が出現した。天安門事件の名誉回復に関する北京市委決定の公表（20 日）で，民主化の機運が急伸した。「11.15/20」は後の胡錦涛・習近平の党首当選日，林彪・江青集団裁判の開始日と重なる。

壁新聞で主張する権利を認めた鄧小平談話（11.26）の後,数千人単位の示威(デモ)行進も現れた。周恩来歿 3 周年（1979.1.8）に,「反飢餓 反迫害 要人権 要民主」（要＝要求する）が叫ばれた。国民党統治末期の大衆の反体制標語(スローガン)の再来は，当時背後で仕向けた中共への諷刺に成る。毛沢東時代の失政への怨恨はともかく，人権･民主の要求は 1 党専制への挑戦と取られた。

改革･開放元年（1979）の劈頭から，実質的な最高実力者鄧小平は武断統治を始めた。「民主の壁」を利用して党首華国鋒の権勢を削いだ後，掌を返す様に大衆運動に牙を剥いた。1 月 18 日，先頭に立つ運動家の傅月華（1945 年生，役人の強姦の被害者）が検挙された。魏も鄧の独裁を喝破した直後（3.29)，反革命罪（1997 年，国家安全危害罪に改称）を問われた。

鄧小平は魏の逮捕と翌日の「4 項基本原則」堅持の表明で,「北京之春」を封じ込めた。社会主義，無産階級(プロレタリア)専制，党の指導とマルクス＝レーニン主義･毛沢東思想が，聖域化した。魏は反革命煽動罪･軍事情報漏洩罪で懲役 15 年に処され（10.16)，1993 年に仮釈放された。翌年に政府転覆陰謀罪で新たに 14 年の刑を受け，服役中に国外へ追放された（1997.11.16)。

1979 年の対越南(ベトナム)「辺境自衛反撃戦」（2.17～3.16）は,建国後初の大規模対外侵攻と成った。反目した旧同盟国の柬埔寨(カンボジア)侵攻（1978.12.25）への「懲罰」は，鄧の治国の鉄腕とも通じる。

戦争関連の機密漏洩で魏を裁いた後，北京市革委決定（12.6）で「西単墻」は閉鎖された。翌年の全人代決議（9.10）で，「大鳴・大放・大字報（壁新聞）・大辯論」の自由も無くなった。

毛沢東「5.20」声明の契機も，友好国柬埔寨が蒙った米軍空爆と軍事政変（3.18）である。外遊中に元首を解任されたシハヌーク（1922.10.31～2012.10.15）は，中国に庇護され続けた。格言の「君子動口不動手」（君子は口は出しても手は出さない）の通り，毛は武力に訴えなかった。柬埔寨と接壌せず利害関係が薄いだけでなく，中共は越境出兵に対し一貫して慎重である。

毛生誕 110 周年に刊行した官製伝記（建国後篇）は，「抗美（米）援朝」に 2 章を割り当てる。朝鮮戦争の勃発は已に北朝鮮を庇う韓国侵攻説を踏襲せず，毛の望まぬ事なのだと記す。米海・空 / 陸軍参戦（6.27, 30）と仁川上陸・漢城占領（9.15, 28）で，北側の攻勢が阻まれた。韓軍の反撃が遂に国境を越えた（10.1）後，米軍も北緯 38 度線を突破し北進した（同 7）。

戦火を起して 99 日で逆転された金日成は，中共建国 1 周年の日に出兵支援を要請した。翌日（10.2）の中央書記処会議と 4・5 日の政治局拡大会議で，反対意見が多数を占めた。林彪も対米の劣勢から病気を口実に司令官就任を断り，毛は已むを得ず彭徳懐に頼った。毛の説得で 5 日に通った参戦は代償が途轍も無く大きく，台湾征服も半永久的に遠退いた。

「3.18」乱射，「6.18」殺害，「2.23」惨事

後の対印度「辺境自衛反撃戦」（1962.10.20～11.21）は，毛が政府・軍の意欲を 3 年間抑えた。印軍の砲撃で即決された（長征開始 28 周年の 10.17）が，敵国への深入りが回避された。勝勢下の一方的な停戦・後退宣言は，ソ連とも衝突する危険性を意識した賢明な挙動である。16 年後の対越戦争も終盤が似た展開ながら，終結宣言（3.6）まで北部 5 省を攻略した。

和製熟語「一罰百戒」は中国語で，同義の「懲一儆百」や数段恐い「殺一警百」と言う。1 人を懲罰して百人を戒める見せしめは，1 人を殺して百人を警告する行り方の比ではない。鄧小平が対越戦争の 10 年後に踏み切った武力鎮圧は，恐怖支配を作る窮極の劇薬である。犠牲を伴う 2 回の戦 / 闘争には，「一労永逸」（1 度苦労して永遠に安逸と成る）の願望が見える。

民国史上最大の大衆運動に対する無差別虐殺は，1926 年「3.18 惨案（悲惨事件）」である。学生主体の反軍閥・反帝国主義示威隊が，天安門広場から執政府前に進んだ処に鎮圧された。段祺瑞（政府首脳，1865.3.6～1936.11.2）の衛兵隊の乱射で，47 人が死に 200 人超が負傷した。教え子を殺された魯迅（作家，1981.9.25～1936.10.19）は，民国以来の最も暗黒な日と断じた。

楊銓（中国民権保障同盟総幹事，1893.5.4～1933.6.18）暗殺事件（上海）も，魯迅の激憤を起した。2 年後同日の瞿秋白処刑と共に典型を成す様に，蒋介石政権の独裁維持の蛮行が多過ぎる。国民党が民心を失った契機に，聞一多（詩人・学者，1899.11.24～1946.7.15）暗殺が有る。但し大陸統治に於いて，段祺瑞も悔恨を痛感した「3.18」惨劇の様な汚名は残していない。

毛沢東は「文革」初の学生造反を支持し，学生運動を鎮圧する者は碌な結末が無いと言った。軍は人を殴り罵る事が戒められる紀律の上，「文革」中に大衆との衝突が禁忌（タブー）とされた。然し，内蒙古（もうこ）軍区軍訓部副部長に由る造反派学生射殺（1967.2.5）で，鉄則は簡単に破られた。軍区本部（自治区首府呼和浩特（フフホト））で作られた前例は，被害側の抑制で大虐殺に成らなかった。

青海「2.23」惨事（省都西寧で軍が学生・労働者等 169 人を射殺）が，集団暴発の走りと成った。「8.28 反革命叛乱（後に冤罪認定）鎮圧」（寧夏回族自治区青銅峡県）で，101 人が射殺された。翌年の南寧（広西壮（チワン）族自治区首府）で，造反派拠点への軍の攻撃（7.31～8.5）で千人超が死んだ。雲南沙甸（でん）鎮の回族「叛乱」（冤罪）への掃蕩（1975.7.29～8.4）も，同規模の死者を出した。

西寧の凶行の咎めで，趙永夫（省軍区副司令，1915～87.10.18）が隔離審査を 10 年間受けた。発砲を許可した葉剣英（軍委副主席，元帥 10 位）も，毛派の反「2 月逆流」で実権を失った。彼は林彪事件後の国防相・党副主席等を以て，栄光の生涯（1897.4.28～1986.10.22）を終えた。10 期 1 中全会（1973.8.30）選出の党副主席 5 人中，3 人も上記の虐殺に関ったと言われる。

青銅峡鎮圧を命じた康生（「中央文革小組」顧問，1998～1975.12.16）は，極左派の黒幕である。林彪・江青集団裁判の前（1980.10.16），生前の罪悪を追及する中央決定で党から除名された。彼（副主席 3 位）は周恩来（1 位）と，蔣介石反共政変（1927.4.12）後の上海に長く潜伏した。顧順章（中央委員，1904～35.6）変節（31.4.24）後，共に家族等十数人の殺害を現場で指揮した。

同じ「文革」後に名誉が回復した沙甸反逆は，王洪文（同 2 位）が鎮圧を命じたと言う。彼は翌年に華国鋒・葉剣英の共謀で逮捕され，獄中に生涯を閉じた（1935.12～91.8.3）。24 年前に指揮した上海最大の武闘（1967.8.4，労働者 10 万人が対立組織を潰す攻略）は，死者が 1 名しか無い。毛沢東は武漢「7.20 事変」後の滞在中，記録映像を観て首肯し許容を示した。

「7.27」落城，「8.5」砲撃，「8.1」暴動

王（上海国棉［紡績］工場の保衛幹事）は曾て，上海工人革命造反総司令部を創立した（1966.11.9）。翌日 2 千人を率いて上京陳情へ赴き，阻止されると鉄軌（レール）に坐り込み広域鉄道運行を停（と）めた。上海発の「文革」前兆の烽火（のろし）（『文滙（わい）報』載姚文元評論）の 1 周年時，彼は忽ち風雲児と成った。「工総司」主導の各界造反派の全市大権奪取（翌年 1.6）で，更に市の指導者に伸（の）し上がった。

所謂（いわゆる）「1 月風暴（暴風）」は当初，露西亜「10 月革命」に因んで「1 月革命」と呼ばれた。新政権の上海人民公社（2.5 成立）も，「巴黎公社」（巴里革命自治体（パリ・コミューン），1871.3.18～5.28）に擬（なぞら）えた。推進派の毛沢東から国体に関る語弊を指摘されて，上海市革命委員会に改称された（2.23）。2 つの日付は軍に由る学生射殺の第 1 号，無差別発砲・大量犠牲の 1 例目と重なる。

巴里革命自治体は普仏戦争（1870.7.19～71.5.10）中，仏蘭西が普魯西（プロイセン）に敗れた頃に起きた。市民・労働者が結成した民衆軍は政府軍の攻撃で，「血の 1 週間」の死闘の末に壊滅した。

95 年後の「5.28」に「中央文革」が組成され，翌日に清華大学附属中学で紅衛兵が生れた。毛の称揚・慫慂で若者造反組織が雨後の筍の如く続出したが，2 年余りで御払箱にされた。

清華大学の派別間の「100 日戦争」（1968.4.23～7.27）が，紅衛兵解体の導火線と成った。18 人死亡・千人超負傷の武闘を制止する為，労働者・解放軍毛沢東思想宣伝隊が進駐した。毛の派遣した 3 万人の気勢も全く効かず，1 派の手榴弾・銃に由る抵抗で 5 人が殺された。毛は翌 28 日未明に首都紅衛兵 5 領袖を面罵し，自ら利用した紅衛兵運動の終結を促した。

全国の武闘は直後の南寧「血案」（流血事件）も含めて，1968 年 7～8 月に最高潮に達した。「文革」初頭の 8 期 11 中全会の中頃（8.5・7），毛は劉少奇更迭の意志を文書化・配布した。『炮打司令部――我的一張大字報』（司令部を砲撃せよ――私の壁新聞）で，直ちに劉を倒した。「資本主義の道を歩む実権派の司令部」に次いで，造反派の司令塔も砲撃の標的と化した。

10 月革命の砲声が我々にマルクス＝レーニン主義を齎してくれた，と毛は中共の祖形を回顧した。1 党独裁体制下の「継続革命」でも，現代中国で儘有る暴力・流血の噴出が強い。彼が檄文を認めた当日の劇変で，劉は国家主席の職務の実質的停止を恣意に命じられた。「文革」の武闘は実弾の砲撃まで激化し，2 年後の 8 月初旬に南寧旧市街で高潮に達した。

毛の政変宣言の配布日は，初代党首解任の中央緊急会議（1927.8.7，漢口）39 周年に当る。国民党右派の上海「4.12」政変に続いて，同左派の武漢国民政府も共産党と袂を分った。内戦を導いた「7.15」決裂は，40 年後の「7.20」騒乱と共に同地 / 季節の危険性を現した。毛は「8.7 会議」で「鉄砲から政権が生れる」と力説し，22 年後の実現で真理と崇められた。

党首後継者の交代（劉→林）を決める中央全会は，意味深長に建軍節（8.1）に幕を開けた。「8.7 会議」の 6 日前の南昌（江西省都）蜂起で，草創期の中共軍（中国工農紅軍）が誕生した。周恩来の統轄で反旗を翻した 3 人の指揮官の内，朱徳は建国前に「朱毛」とも並称された。後に毛の統帥権独攬で名誉職（全人代委員長）に回され，林「副統帥」の急伸を唯々傍観した。

市公安局長の朱と同じ中共党員の葉挺は，国民革命軍の「鉄軍」首長として誉れ高い。彼は新 4 軍（抗日戦争期の中共南方軍）軍長在任中，皖南事変（1942.1.5～14）で国民党に敗れた。安徽（別称「皖」）南部で行軍中に包囲・討伐され，14 日に談判に赴き身柄を拘束された。4 年後の釈放（高官俘虜の交換，3.4）後「4.8」事故に遭い，50 歳未満（1896.9.10 生）で没した。

蔣介石は軍令違反を理由に新 4 軍を「叛軍」と断罪し，17 日に編制抹消の処分を下した。周恩来は翌日の新聞に，「千古奇冤 / 江南一葉 / 同室操戈 / 相煎何急 ?!」の揮毫で抗議した。兄曹丕に迫害された曹植（曹操の子）の句を借りて，相煎る何ぞ急たると内輪虐めを糾す。両党の同根性が現れる様に，同胞が干戈を交え怪奇な冤罪を作る事は「文革」にも見えた。

「1.4」劇変，「3.14」凶行，「8.24」惨死

「彭羅陸楊」解任の日（1966.5.23），陶鋳が中央書記処常務書記兼中宣部長に抜擢された。8 月の指導部改組で劉少奇降格（2 → 8 位）等に伴って，毛・林・周に次ぐ頂上級まで上った。然し翌年 1 月 4 日に突如江青等の糾弾を受け，即座に軟禁され定番の迫害死へ向った。25 年前の皖南事変の時機（出発の 1.4）と重なり，逝去地の合肥も皖の行政中心地である。

南昌蜂起で葉と同じ軍長の賀龍（1896.3.22 生）は翌月に入党し，後に元帥（5 位）と成った。彭徳懐解任後の軍委副主席（2 位）を経て，林彪（1 位）の敵視で軟禁された（1967.1.20）。惨死（1969.6.9）は劉・陶と共に 69 の不吉を思わせ，命日は胡風（16 年後の 6.8）と隣り合う。陶の誕生日（1.16）は 79 年後の胡耀邦辞任と同日で，小寒（1.5/6）～大寒間の陰気を帯びる。

新 4 軍主力の壊滅後，脱出した項英副軍長・周子昆副参謀長が副官に射殺された（3.14）。山奥に身を潜めた 2 人は軍資金を携えている故，財貨を貪る劉厚総の裏切りで命を落した。同じ穴の貉（むじな）ならぬ同じ穴（洞窟）に棲む戦友が，「同室操槍（銃を操る）」の凶行に走った。元最高指導部成員（政治局常委）の変死で，秦城監獄落成日の直前に当る命日の暗さを感じる。

項（1898.5 生）は同齢の劉少奇・周恩来・彭徳懐・康生と共に，「98 年」組要人に数える。中国語の「九八（jiǔbā）」は発音が「久発（jiǔfā）」と通じ，長久な発展・「発財」（金儲け）等を連想させる。「吉祥数（ラッキー・ナンバー）」付きの生れも甲斐が無く，周を除く 4 人は非業の死や歿後の罰に見舞われた。睡眠中に意識が無い儘で即死した項よりも，生き地獄に投げられた劉・彭は惨めである。

8 期 11 中全会採択の「文革」指針の決定は，年月日が「吉祥数（ラッキー・ナンバー）」尽（づくめ）（66.8.8）である。「六（liù）」は「禄（lù）/ 路（lù）」の俸禄・活路に，6688 は「路路発発」（全ての道で発展して行く）に繋がる。毛沢東の第 1 回紅衛兵接見の「8.18」も，「発一発」（発して見る / 一儲けしよう）の響きが有る。然し朝野の発狂が善良な願望を打ち砕き，1966 年 8 月は「紅色恐怖（あかいテロ）」氾濫の決壊と成った。

天安門広場での空前規模（100 万人）の集会の翌々日，「破四旧」（四旧打破）の嵐が吹いた。旧い思想・文化・風俗・習慣の一掃を名目に，紅衛兵の家宅捜査・殴打の暴行が続発した。「黒 5 類」（地主・富農・反革命分子・悪質分子・右派分子）等が，害虫の如く追放・虐殺された。7 年後の同日（8.20）の林彪一味への処分は，「文革」劈頭の暴走への奇妙な清算とも思える。

「文革」後期の党大会（「10 大」）の開幕（1973.8.24）も，7 年前の同日の惨事と因縁が有る。周恩来は 2 年後のこの日に，今日は老舎（漢族，作家，1899.2.3 生）の「忌日」（命日）だと言った。周の要請で建国直後に米国から帰国した彼は，造反派の罵倒・痛打に耐えず入水自殺した。同じ日に，李達（哲学者・武漢大学学長，1890.10.2 生）が苛酷な批判大会の所為で病死した。

李は同じ「1 大」代表の毛沢東と親交が有るが，救命を頼む嘆願は効かなかった。曾て毛の大病を治した傅連暲（衛生部次官，中将，1894.9.14 生）も，毛の保護が得られなかった。秦城に投獄され（落成 8 周年の前日の 1968.3.14），14 日後に手錠が掛った儘で死んだ。林彪の仮病を毛に告げた事も破滅を招いたが，後の祭りめく毛の指示（1975.5.17）で名誉が回復した。

傅の囚人番号「6847」は 1968 年の 47 人目を表し，前の 73 日間に 46 人も入った訳（わけ）である。

年頭新参（春節の4日前の1.26，同6821～23）の要人に，「中央文革」の戚本禹・王力・関鋒が居た。3人（1931.5.8～2016.4.20，22.8.11～96.10.21，19.7～05.6.7）は，極左派の急先鋒を成した。寵臣から「替罪羊」（贖罪の山羊）への転落は，真夏の熱狂と大寒の冷厳を印象付ける。

「7.22」凱旋，「8.22」放火，「3.22」逮捕

王は陶鋳失脚の4日後（1967.1.8），陶の中宣部長に代る中央宣伝組組長に命ぜられた。彼は中央代表として赴いた武漢で2大造反派組織の片方を支持し，「7.20事変」を惹起した。謝富治（副総理兼公安相，上将，1909.9.26生）と共に脱出し，帰京時（22日）盛大に歓迎された。25日に謝・王の凱旋を祝う百万人集会が催され，英雄視された王は増々怪気焔を上げた。

彼は8月7日に外交部の造反派代表を呼び，陳毅外相批判と指導部・制度改変を煽った。19～22日に外交部は造反派の業務監督小組に支配され，中央の制御から完全に離脱した。頭目の姚登山は元駐インドネシア臨時代理大使で，反中勢力と闘った末に引き揚げた（4.22）。周恩来等数千人に迎えられ「紅色外交戦士」と称賛された事で，王と同じ自惚れに陥った。

「破四旧」の「紅色恐怖」勃発1周年の20日，偽「外交部」が無法な妄動を為出かした。英国代理大使事務所への通告で，香港政庁の親中派鎮圧に抗議し報道規制の撤回を求めた。回答期限の48時間を過ぎた22日夜，紅衛兵等1万人が事務所を包囲して示威を行った。一部の人が警備兵の制止を顧みず構内に闖入し，略奪・破壊も含む焼き討ち事件を起した。

周は建国後最大の渉外違法事件に憤り，外交・軍を乱す王・関の不埒を毛沢東に告発した。使者楊成武（総参謀長代理，上将，1914.10.27～2004.2.14）が即日（25），上海へ飛んで伝言した。毛は翌朝に王・関の逮捕を決断し，周は当夜の会議で執行した（戚の逮捕は後の毛の命に拠る）。「中央文革」3主力の失墜で左旋回の勢いが削がれ，前年に続く8月の暴走が鎮静化した。

王は1954年以降の中宣部長（陸定一・陶鋳）の後を追い，14年の獄中生活を送った。楊成武の受難も，同時期の総参謀長（粟裕［大将，侗族，1907.8.10～84.2.5］・黄克誠・羅瑞卿）に次ぐ。彼と同じ日（1968.3.22）に，余立金（空軍政治委員，中将，13.12.4～78.12.2）も逮捕された。傅崇碧（北京衛戍区司令，少将，1916～2003.1.17）も，同日の解任後に異動先の瀋陽で拘束された。

24日に将校1万人の大会で林彪が楊・余・傅処分を告げ，毛も壇上から参加者を接見した。3人とも6年余り，囚人の身と為った（楊が武漢・洛陽・開封，余が秦城，傅が瀋陽等数ヵ所）。毛は1973年12月21日の軍委拡大会議で，冤罪を認め林彪の讒言を信じた過ちを謝った。5年後の翌日に終る11期3中全会の名誉回復と共に，歳末調整の様な軌道修正の観が有る。

余が「彭羅陸楊」中の彭真・陸定一と同じ監獄に居たのは，「叛徒」の重い罪名の為か。王任重（中央中南局・湖北省委第1書記，1917.1～92.3.16）も，秦城を始め8年余り監禁された。李達批判に積極的な彼の「中央文革」創設成員は，「文革」初年の最終盤に脆くも失脚した。

12 年後の同月の副総理就任と翌々年の中宣部長就任は，時代の反転や回帰を窺わせる。

建党時の中央宣伝局主任李達は，1923 年に党首との衝突で離党し建国直後に復籍した。中宣部（1922.8 設立）の 1・5 代目部長蔡和森（1895.3.30～1931.8.4）は，国民党に処刑された。2 代目の羅章龍（1896～1995.2.3）は，派閥闘争で第 2 中央を作った為に除名された（1931.1.27）。次の彭述之（1895.11.26～1983.11.28）も，トロツキー派の結成で党籍を剥奪された（1929.11.25）。

第 4･6 と 7 代の瞿秋白と李立三は共に党首と成り，其々内戦で殺害され，内乱で自裁した。次の沈沢民は内憂外患の暗黒期（1931.1～4）に務め，肺病で若死した（1900.6.23～33.11.20）。第 9（一部党首兼任）と 10・12 代の張聞天と陸定一は，後に「反党集団」の同 3 位にされた。第 11 代の習仲勳も 8 期 10 中全会（1962.9.24～27）で，「反党集団」の首領に仕立てられた。

「12.20」激突，「12.22」来復，「12.28」放言

習は査問を経て 1965 年に洛陽の工場に左遷され，68～75 年に北京で軍に「監護」された。妻斉心（1926.11? 生）との間に生れた次男近平との再会時，長い隔絶で認識できなかった。彼は苦難を凌いだ後に政治局委員等の要職を得て，天寿（1913.10.15～2002.5.24）を全うした。一方，前妻郝（かく）明珠（1916.6.24～2006.4）の生んだ長女和平（1938～68）が迫害を苦に自殺した。

沈沢民の妻張琴秋（元紅 4 方面軍政治部主任，紡績工業部次官）も，自決した（1904.11.15～68.4.22）。娘張瑪琿（計算機開発技師）は巻き添えや迫害に遭い，「文革」末年に後を追った（1926.5～76.?）。彼女の次の夫（後離婚）陳昌浩（元紅 4 方面軍政委，中央編訳局副局長）も，自ら命を絶った。政治局委員経験者の陳の迫害死（1906.9.18～67.7.30）は，同じ武闘盛行の季節であった。

沈の兄徳鴻（字（あざな）雁氷，筆名（ペン・ネーム）茅盾，1896.8.12～81.3.27）は，高名な小説家・評論家である。兄弟とも上海共産主義小組（中共の前身，1920.8 成立）・中共の創設成員（各 17・53 人）である。国共決裂後に党と疎遠し建国後 2 回復籍を求めたが，歿 4 日後に実現した（建党年より起算）。建国時に党外人士・文化界の重鎮として入閣し，初代文化相を「文革」直前まで務めた。

第 3 期全人代初全会の閉幕日（1965.1.4）の内閣改造で，文化相は陸定一（副総理）に変った。「文革」前の同職は 2 人の浙江・江蘇省民で固め，古来秀才が多い呉越の文化力を示した。陸が兼務した中宣部長も歴代に無錫生れの 3 人の他，江南の出身者の人 / 年数が多い。早期の湖南組（李達・蔡・羅・彭・李立三）に対して，瞿（江蘇）・沈・張・陸はこの広域である。

湖南人の毛沢東は故郷が劉少奇・彭徳懐に近いが，「同郷操戈」の攻撃に容赦が無い。劉の国家主席（1959.4.27 就任）再選の当・翌々日，毛は政治局常委拡大会議で暗に彼を謗った。全人代総会開幕（1964.12.21）の前日の同会議で，2 人は社会主義教育運動を巡って論争した。71 歳の誕生日（26）を祝う小宴と 2 日後の会議でも，名指しせぬ非難で亀裂が顕在化した。

毛は翌 28 日の中央工作会議閉会式で，党規約と憲法を持ち出して民主・自由を説いた。

批判を許す民主や法律上の万人平等，言論･集会の自由を挙げて，自分への抑圧に激怒した。発言中に劉が憚らず口を挟んだ事，一般の会議には出なくて可いと鄧小平が配慮した事で，彼の自尊心が傷付き，2人は代償として「資産階級司令部」の1・2位として打倒された。

改革･開放の起点と成る1978年の11期3中全会は，一陽来復の冬至（12.22）に閉幕した。陰が極まって陽に返ると言う節気は，悪い事が続く後に漸く善い方へ向う寓意を持つ。毛の当節の挙動は逆に，陰謀→「陽謀」（公然たる計謀を表す彼の造語）の展開が屢々現れた。「文革」の前々年の冬至の前々日の劉との激突で，偽装を殴り捨てて宣戦布告を口にした。

彼は農村の悪質幹部を取り締る話に即して，資本主義の道を歩む実権派を槍玉に上げた。「挽弓当挽強，用箭当用長。射人先射馬，擒賊先擒王」（弓を挽かば強きを挽く当し，箭を用いば長く用う当し。人を射ば先ず馬を射よ，賊を擒にせば先ず王を擒にせよ），という杜甫の詩を引いて，大物を先に倒して置けば，狐（狡賢い小物）等はゆっくり片付くと可い，と主張した。

資産階級は殆ど消えたのに資本主義志向派は有り得るか，と劉は真っ当な疑問をぶつけた。石炭省・冶金省では誰がそんな敵対分子かと劉が質すと，毛は口任せに張霖之だと答えた。更に例示を求めれば俎上に載せる人が増える，と劉は被害の拡大を恐れて口を噤んだ。石炭工業相の張（1908年生）は毛の放言が尾を引いた結果，閣僚の迫害死第1号と為った。

「1.22」撲殺，「1.21」変死，「1.8」憤死

2年後の12月14日，江青は北京鉱業学院の紅衛兵に対して張を彭真の私党と陥れた。張は中央の決定に由り19日から同学院で批判・査問を受け，翌年1月22日に撲殺された。前日に陶勇（東海艦隊司令，海軍中将，当日満54歳）が，招待所構内の井戸に不審死を遂げた。衛恒（山西省委第1書記，1915～67.1.30）の私設監獄内自殺を含めて，大物の変死が相継いだ。

1級行政区（省・中央直轄市・自治区）首長の迫害死は，1月8日の閻紅彦が最初である。彼は党・軍の要職（雲南省委第1書記・昆明［広域］軍区第1政委）を兼ね，上将でもある。57年の人生（1909.10.26生）を終えた自害は上将の唯一の例で，江青を恨む遺書も異例と為る。極左派が自賛した「1月革命」の「紅色風暴」は，暴力の血で染まった黒い物に他ならない。

閻は長征後の中央根拠地の生え抜き組の代表として上将入りした（48位）が，陝北紅軍の創設者劉志丹（1903.10.4～36.4.14）･謝子長（1897～1935.2.21）は疾に戦死した。劉は歿年に「群衆領袖，民族英雄」と毛に讃えられ，故郷（保安県）が志丹県に改名された。中央西北工作委員会･陝（西）甘（粛）寧（夏）辺区（政治特区）政府は6年後，安定県を子長県に変えた。

烈士を記念する県名は陝西が半分弱を占め，3番目が子洲県（綏徳より改名，1944）である。李子洲（省委書記代理，1892.12.23～1929.6.18）は，時の陝北根拠地に似合う別格扱いを受けた。同志に売られて獄死した結末は，6年後に裏切りで正体がばれて銃殺された瞿秋白と重なる。

「816」（「発一路」［一路発展］）の数を含む日は，楊銓暗殺（李歿の4年後）にも不吉が見られた。

山西遼県の改称は，同年に当地で戦死した左権（1905.3.15～42.5.25）を偲ぶ為である。彼（8路軍［北方中共軍］副参謀長）の故郷（湖南省醴陵県）は，英傑輩出の故に特待に及ばない。生誕55周年の日に落成した秦城監獄と無縁の彼も，冤罪・処罰を死後まで50年間被（こうむ）った。1932年の反革命粛清で受けた処分（党籍留保の謹慎半年）は，半世紀後に漸く取り消された。

靖宇県（吉林省濛江県より改称，1946）は，楊靖宇（1905.2.13，河南省確山県生）が由来である。東北抗日聯軍第1路軍総司令兼政委の彼は，左権と同じく日本軍の凶弾に倒れた（1940.2.23）。同年改称の黒龍江省尚志県も，抗聯の趙尚志（第2路軍副総指揮，1908.10.26～46.2.12）に因む。元の珠河県も生地（遼寧朝陽県）ではなく，1933年に抗日遊撃隊を立ち上げた古巣である。

趙は小部隊を率いて同省羅北県で警察分駐所を襲撃中，敵の回し者に撃たれ直後に死んだ。彼は珠河遊撃隊の結成の前後に，党内の路線闘争の影響で党籍剥奪→回復を経験した。出張先のソ連で反共産国際（コミンテルン）として監禁され（1938～39），帰国後に党から永久に除名された。42年後（1982）初めて覆されたが，汚名が付いた儘に美名を享受したのは不思議である。

河北省黄驊（か）県（元新青県）は，烈士（湖北陽新県生，1911～43.6.30）殉職の2年後に改称された。黄（冀［河北］魯［山東］辺軍区副司令）は，邢仁甫（同司令，1910～50.9.7）の指図で暗殺された。日本軍に寝返りし後に逮捕・処刑された邢は，8路軍の最高位裏切り者として歴史に残る。私怨に由る凶行で無名の黄が破格の顕彰を受けた結果は，思いも寄らない皮肉である。

『辞海』（国語辞典＋百科辞典の最高峰）の【黄驊】は，人名・地名（下線表示）の両義が有る。1979版の❶の結び（「1943年6月20日，河北新海［現黄驊県］で日本侵略軍と作戦中に犠牲」）は，次の第4版（1989）で史実の通り修正された（「後に河北新海［現黄驊］で裏切り者に殺害された」）。昔の編者は真相を不名誉に感じたのか，日付・死因の改竄（ざん）は栄光を添える粉飾と思われる。

当初の❷「県名」の説明（「1937年に新海設治局を設け，1943年に黄驊県に改めた」）は，新版で修正された（「1935年に滄県・塩山両県から分離して新海設治局を設け［1937年批准］，後に新海県を設置し，1942年に青城県と合併して新青県に改め，1945年に黄驊烈士を記念する為に黄驊県に改めた」）が，❶の「在河北新海〔ママ〕［今黄驊］被叛徒殺害」の誤記は，次の1999年版で初めて直された。

改革・開放元年版の新設と建国40周年版の部分訂正は，両義とも知名度が低い事を示す。同50周年版で漸く不実・不整合が消えたが，1989年の昇格に由る❷「市名」が目を引く。同書は毛沢東が推進した国家的な事業で，人名・地名の立項は名誉な事で軽易に出来ない。黄驊は「載入史冊」（史書掲載）・県名改称の特待を享（う）け，当地の声価も昇格で更に高まった。

「4.8」空難，「6.3」冤死，「5.1」斬殺

対敵闘争中の戦死・獄死等以外の不慮の死は，事件・事故に由る犠牲も烈士の要件に入る。

数県改称の最後と為る1946年の要人等墜落の「4.8空難」死者も,「4.8烈士」と称される。建国後の模範兵士雷鋒（1940.12.18～62.8.15）も事故で殉職後，駐屯地（遼寧省撫順市望花区）の烈士公墓に埋葬された（翌々年，区内唯一の公園［後に雷鋒公園］に記念館と共に建てた墓に移した）。

葉挺は中央軍委選定（1989.11）の「中国人民解放軍軍事家」33人の内13位に居り，毛沢東・周恩来・朱徳・鄧小平と彭徳懐等8元帥（元帥3位の林彪は差別的な最下位）に次ぐ。30位の左権と増補（1994.8）3名中最下位の劉志丹は英名が地名を冠するに至ったが，葉を始め建国前に戦争・事故・病気・迫害で死去した他の9人は黄驊並みの栄誉も無い。

14・15位の楊尚昆・李先念（1909.6.23～92.6.21）は，建国後に軍を離れ将軍の授与が無い。李は副総理を経て大体無傷で「文革」を凌ぎ，党副主席・国家主席（楊の前任）まで務めた。以下10大将中1・3位の粟裕・黄克誠は，1958・59年に相継いで総参謀長等を解任された。2位の徐海東（1900.6.17～70.3.25）は過労に由る虚弱が幸いし，迫害の魔手に掛らなかった。

4位の陳賡（こう）（1903.2.27～61.3.16）も劉伯承・粟失脚の年に，副総参謀長の職を外された。彼の妹を娶（めと）った5位の譚政（1906.6.14～88.11.6）は，60年に「反党宗派集団頭目」にされた。次の蕭勁光（けい）（1903.1.4～89.3.29）は海軍司令を30年務めたが，「文革」中に実権を奪われた。7位の張雲逸（1892.8.10～74.11.19）は病弱・淡泊の故，政争・粛清の圏外に安住できた。

次の羅瑞卿は黄に次ぐ総参謀長の在任中，楊（軍委秘書長の2代前先輩）の翌月に失脚した。9位の王樹声（1905.5.26～74.1.7）は病人を除く現役組の内，例外的に地位を保ち通した。彼は紅4方面軍の代表として，国防次官（1954年任命の7人中，黄・譚・蕭に次ぐ）と成った。戦績が及ばないのに大将に上ったのも，不授与と為る同勢力の李先念に代る意味が有る。

紅軍の3方面軍中の第1（中央）は上位の多数を占め，第4は徐元帥と徐・王大将しか居ない。紅2方面軍も賀龍元帥・許光達大将（1908.11.19～69.6.3）の各1人で，許は最下位に当る。装甲兵司令の彼は軽量級の自覚から固辞し毛に激賞されたが，後に政変容疑を掛けられた。賀の私党として拘束された（1967.1.16）末，賀より6日早く監禁先で迫害死を受けた。

許は幸い『解放軍報』（軍機関紙）に訃報が出て，遺骨が八宝山革命公墓に入った（6.26, 30）。彼の6日前に自由を失った賀は，歿6周年の日に漸くその要人墓地で安置儀式が開かれた。賀は部分的な名誉回復（1974.9.29）の8年後，初めて名誉が全面的に回復された（82.10.16）。許は逝去8周年の日に名誉回復が訪れたが，紅2方面軍の総帥・大将の一挙全滅は酷（ひど）い。

紅2・4方面軍の頂上級将帥の少なさは，中央直系に劣る傍系と共に自滅の結果でもある。次の許継慎（紅1軍軍長，1901.3.10～31.11）・29位の曾中生（紅4軍政委，00.6.10～35.8中旬）は，其々紅4方面軍で敵の離間の計に由る死刑と為り，中央への告発を封じる為に殺害された。28位の段徳昌（紅6軍軍長，1904.8.19～33.5.1）は，紅2方面軍の粛清で斬殺に処された。

27位の蔡申熙（紅25軍軍長，1906.2.12～32.10.9）は，紅4方面軍の粛清を逃れて戦死した。前任の曠継勳（1895.6.16～1933.6.7）は幾度の降任・免職の後，冤罪で秘密裡に処刑された。

左権に次ぐ彭雪楓（新4軍第4師師長，1907.9.9～44.9.11）は，戦死の20年後に汚辱された。
1964年の大晦日，中国人民革命軍事博物館・中国歴史博物館の展示から彼の名が消された。
次の羅炳輝（1897.12.22～1946.6.21）も，陳毅・栗裕と同じ新4軍勢（第2副軍長）である。
雲南彝良県に生れ山東蘭陵県で病没したが，中共は同年に安徽天長県を炳輝県に改めた。
1960年の旧称復帰で烈士冠名県と一線を劃し，通常の死が特待対象外である事を示唆する。
異端扱いの林彪を除く最下位の彼は死後も傷付かないが，元帥群の明暗と二重映しに為る。

36 兵家，「9.30」定礎，300年不滅

1～6位の朱徳・彭徳懐・林彪・劉伯承・賀龍・陳毅は，半隠居の朱だけが安泰を得た。
左遷に甘んじ活力を失った劉は死滅を免れ，7位の羅栄桓も病没で「文革」と無縁である。
次の徐向前は陳と共に失脚し，以下の聶栄臻・葉剣英の相対的な無事を際立たせる。聶（1899.12.29～1992.5.14）は国防工業の総帥で，同分野の王樹声も身分の保障が考えられる。
軍事家の数は『水滸伝』の好漢108人の上位36人，兵法要訣「三十六計」を連想させる。
増補3人は中途半端であるが，西北紅軍の代表劉志丹の様に諸々の均衡が図られた事か。
黄公略（紅6軍軍長，1898.1.24～1931.9.15）は，数々の戦功を立て最後に敵機の掃射で死んだ。
方志敏（紅10軍団軍政委員会主席，1899.8.21～1935.8.6）は，敵に処刑され不屈の伝説を遺した。
「文革」前期の「副統帥」は第1陣で，「還有林彪」（猶林彪も居る）の記載で末席に置かれた。
実質的な下位者の安全は羅炳輝や増補組が証で，志丹県の不易も劉の名声の健在を物語る。
共に残る左権県が故郷ならぬ戦死の地である事は，蔡申熙も湖南醴陵人だから納得が行く。
蔡が戦死した湖北黄安（現紅安）も李先念の他，開国上将6名が出た「将軍県」である。
日本語の「安らかに眠って下さい」に当る中国の弔辞は，同じ意味の「安息吧」である。
一方，要人や英雄・烈士を悼む中国流の究極の表現は，「永垂不朽」（永遠に不朽あれ）と言う。
天安門広場に在る人民英雄記念碑の正面に，毛沢東書「人民英雄永垂不朽」と刻んである。
金製の文字は4大長寿王朝の平均期間（290年）を超える様に，300年の輝きが保証される。
記念碑は開国大典の前日に定礎式が行われ，建軍25周年記念日（1952.8.1）に起工した。
中共の労働者階級の前衛隊の性質を体現して，除幕（1958.5.1）は国際的労働者祭に合せた。
3年・30年来の解放戦争・人民革命から，鴉片戦争（1840.6.28～42.8.29）まで範囲が遡る。
近代（鴉片戦争～）・現代（1919年「5.4運動」～）の英雄・烈士が，全て永久記念の対象と成る。
「永垂」の「垂」（後世に伝わる）は，「青史垂/留名」（青史に名を遺す/留める）の熟語が有る。
「不朽」の由来（『春秋左氏伝・襄公二十四年』）は，中共建国の2498年前（紀元前549）に当る。
その「立徳・立功・立言」（徳を立て，功を立て，言を立てる）は，「三不朽」と並称される。
先ず徳行を樹て，次に功績を創り，最後に言説を残す，という手順も正統な規範である。

人民英雄記念碑の建立は,「垂名」の為の「樹碑立伝」（碑を樹て伝を立てる）の一環である。英名・殊勲を顕彰する「立言」の手段として，伝記に由る「伝世」（後世に伝える）も有る。劉志丹も故郷の県名を冠する厚遇の他，指導者の賛辞を刻んだ石碑が縁（ゆかり）の地に設置された。更に建国５年目に，中宣部の指示で工人出版社が彼を称賛する小説の創作・刊行に動いた。

時の中宣部長習仲勳は出身・戦歴も含めて陝西勢に属し，古巣の劉に格別の感情を持った。英雄伝説を不朽にする為の普及作業は，故人の義妹劉建彤（とう）（1919.3.26～2005.2.14）が務めた。彼女は 1958～59 年に３稿を書き，習（副総理兼国務院秘書長）の助言で 61～62 年に直した。中宣部の周揚の許可を得て複数の全国紙で連載し始めたが，間も無く筆禍を招来した。

作中に登場した閻紅彦は，歴史の問題は中央の判断が要るとして著者に公刊中止を求めた。曾て劉志丹に身を寄せた後その権力を奪い一部の人を殺した，と描かれた故の不満である。直訴を受けた康生（政治局委員候補）は掲載を封殺し，『劉志丹』を反党小説に仕立てた。毛は経済運営の失敗に由る威信低下を挽回する為,「習賈劉反党集団」の粛清を認めた。

「4.4」除名,「8.17」自裁,「3.20」就任

３人中の賈拓夫（国家経済委員会副主任，1912～67.5.7）は，左遷の末に真相不明の変死を遂げた。劉景範（劉志丹の弟，地質部次官，1910.9.20～90.8.9）も，失脚の上「文革」の迫害を受けた。妻建彤（中国地質科学院党委副書記）は査問を経て，1970 年に党籍剥奪・労働改造に処された。「反党集団成員」馬文瑞（労働相，1912.11.4～2004.1.3）は，賈の死後「習馬劉」に昇格された。

習仲勳は３稿に対する修正意見で，時代・中国革命・毛沢東思想の縮図にするよう述べた。無私の善意とは裏腹に，自分が原型（モデル）である政治部主任の造形には謙譲を示さなかった。この点は中央全会後の特別案件委員会の査問で，党・国の権力を簒奪する野心の証とされた。疚しさが無く保身が要らぬ心算（つもり）でも，「避嫌」（嫌疑を避ける）意識の稀薄が落し穴に為った。

その第２の罪名より重いのは，虚構人物の羅炎に高崗の形象（イメージ）を託し肯定的に描く事である。高は陝北紅軍の大物で，建国初期に中央政府副主席と東北の党・政・軍首長を兼務した。国家計画委員会主席就任の 1953 年，劉少奇・周恩来下ろしを試み毛に見切りを付けられた。翌年以降の批判で「反党連盟」を断罪され，７期５中全会（1955.4.4）で党籍を剥奪された。

志願軍朝鮮参戦記念日の原点は奇しくも，高（1905.10.25 生）の 45 歳の誕生日に当る。「東北王」が推進した後方支援は彭徳懐司令から，勝利を導く２大功臣の筆頭に挙げられた。次の洪学智（志願軍副司令兼後方勤務司令）は，軍総後勤部長在任中に彭の失脚で左遷された。彼も伝奇的な人で,開国上将中 1988 年の階級復活で唯一再び上将（新制度の最高位）と成った。

洪は「文革」後も総後勤部長を務め,長寿（1913.2.2～2006.11.20）が国民平均より遥かに高い。対して高は「半百」（50 歳）も未満で，自決未遂（1954.2.17）の半年後に自ら命を絶った。現

役の政治局委員の自裁は彼だけで，元成員（李立三・江青）の自殺より衝撃度が数倍も高い。洪の3年前の同日に生れた姫鵬飛元副総理の場合も，引退9年後の90歳時の事である。

毛沢東は建国27周年の3週間前に歿し，執政9840日の中点（1963.3.21）は天数を含む。彼の最高権力掌握4年余り後の党首正式就任（政治局･書記処主席）は，20年前の前日である。毛は治世の前半の数年毎（ごと）の粛清で，指導部成員を頭とする「反党連盟/集団」を3つ潰した。其々の標的No.1は建国直前の第1（西北）野戦軍司令の彭を含めて，全て西北縁（ゆかり）組である。

中央紅軍の長征は11ヵ月の迷走後，初めて陝北根拠地の存在を知り目的地が決った。劉志丹の戦死後に地盤は中央根拠地と化し，先住勢と新来組の力関係は完全に逆転した。『劉志丹』が上層部の神経を逆撫でした事由には，中央を助けた西北の貢献を誇示した点も有る。「聖地」延安で「革命の揺籠（ゆりかご）」に安住した毛は，建国後1度も恩返しで訪ねる事が無い。

周恩来は黎笋（レズアン）（越南労働党第1書記，1907.4.7～86.7.10）をお伴し，26年振りに延安に行った（73.6.9～10）。昔粟で腹を拵（こしら）えさせてくれた人々の貧困に驚き，総理失格と沈痛に自責した。彭も国・民を憂（うれ）って，毛に意見書（1959.7.14）で「大躍進」（58.5.23発動）の破綻を直言した。悲しい事に毛は異論を己（おのれ）への挑戦と見做し，伝家の宝刀を抜いて反対派を斬った。

周はポンピドー（仏大統領，1911.7.5～74.4.2）訪中（73.9.11～17）の2日目，文芸晩会（ゆうべ）で接遇（もてな）した。彼の指示で李劫夫（1913.11.17～76.12.17）作曲の革命歌が演奏され，江青の不興を買った。李は林彪に近い為2年前の「9.13」後5年も拘束され，周の選曲は禁忌を破った訳である。林の「翻案」（再評価）を疑う江は政争にしか関心が無く，大衆との乖離が唾（だ）棄を招いた。

「12.16」更迭，「7.4」懇談，「1.31」解任

不条理な事に，志願軍司令の就任を快諾した彭は失脚し，断った林は毛の後継者に成った。志願軍派遣に関る毛の決断には，国家間の全面対抗を招き易い「支援軍」からの改名も有る。同音（zhiyuan）の代案を考えた黄炎培（1878.10.1～1965.12.21）は，教育家・実業家である。彼は71歳の誕生日に際した建国で，民主党派の代表として副総理兼軽工業相に就任した。

黄は退任（1954）後「文革」前の最後の冬至の前日に病没し，家族の被災を見ずに済んだ。第5子必信（教師，生年未詳）は1957年「右派分子」とされ，66年6月14日に首を吊った。その娘（14歳）は10月に行方不明と為り，妻余啓運も自ら命を絶った（1968.6.15，歿年未詳）。当人の妻姚維鈞（1909年生）は，68年の大寒の前日（1.20）に致死量の睡眠薬で自害した。

黄に継ぐ軽工業相（1954.9～56.5）の賈拓夫は，高崗粛清の難を免れ彭と共に失脚した。朝鮮戦争の後方・前線で共闘した高・彭への毛の打撃は，其々冬至と大暑の辺りに始動した。高の場合は要人への働き掛け（1953.12.17～22）を経て，面談・会議（23，24）で譴責した。11年後の同月20・26・28日の劉少奇批判も，冬至に似合う厳冬到来の気配がじわりと漂った。

「文革」前の最後の師走(しわす)も，「導師」（指導者）毛の羅瑞卿打倒等の暴走で明け暮れた。葉群伝達の林彪の誣(ぶ)告（11.30）に基づいて，政治局常委拡大会議（8～16）で更迭が決定した。初日の24年前の「偸襲珍珠港」（真珠湾奇襲）以上に，大半の参加者は議題も知らなかった。11日に会場の上海に呼ばれた羅も不意討ちに気付かず，弁明の機会も与えられなかった。

毛は21日に杭州（浙江省都）で，姚文元の呉晗(がん)批判と戚本禹の翦(せん)伯賛歴史観批判を激賞した。翦（維吾爾(ウイグル)族，歴史学者・北京大学副学長，1898.4.14生）に就いて，名指しするが可いと指示した。彼は8期12中全会閉幕式で，学術権威者の翦・呉には行(や)り過ぎるなと戒めたが，掛け声は空しく，48日後（1968.12.18）翦は追及に抗議し妻戴淑婉（2歳年下）と共に自殺した。

呉晗（1909.8.11生）は歴史学者・教授（37.9より雲南 / 西南聯合 / 清華大学）を経て，中国民主政団同盟参加（43.7）→北京副市長就任（49.11）→中共入党（57.3，未公表）と社会活動家に変身した。彼は「反右」初頭の全人代総会（第1期4次，1957.6.26～7.15）で，長年の民盟市委責任者として高名な民主人士を告発し（7.7），「右派」代表が続々と謝罪する流れを作った。

彼は御用文人の技倆で毛沢東の海瑞（明(みん)の政治家，1514～87）評（1959.4.5）に迎合して，『海瑞罵皇帝（皇帝を罵る）』（筆名劉勉之，『人民日報』6.16）等で古賢の剛直に学ぶよう唱えた。新編歴史劇『海瑞罷（免）官』（翌年執筆）の刊行・公演（1961.1，2.11）は毛も好評をし，主演の馬連良（北京京劇団団長）を公邸兼私邸での小宴に招き（日付未詳）脚本・演技を讃えた。

呉は彭徳懐失脚後に用心深く彼を海と一線を劃したが，諫言・罷免との類似性が「文革」の突破口に利用された。毛は江青・張春橋が画策した姚文元（『解放日報』文芸部主任）の『海瑞罷官』批判を支持し，呉も翦も入党していながら反共で国民党だと断罪した（1966.3.18）。2年後の同月に呉は秦城監獄に入れられ，変死（自殺か，1969.10.11）後に遺骨も消された。

丸3年後の妻袁震の窮死（1907～69.3.18），養女小彦（54～76.9.23）の発狂（73）・拘束（75）・自殺（精神病院にて）の他，名優の馬も吊し上げが応えて急死した（01.2.28～66.12.16）。呉の『朱元璋伝』（1944，49・54・65年改版）は毛の興味を引いたが，明太祖（1328～98，68～98在位）の官僚・知識人に対する粛清・弾圧は，彼を尊ぶ毛も大々的に行い呉は犠牲と為った。

黄炎培は1945年，国民参政会（政府主宰の超党派民意諮問機関）参政員として延安を訪ねた。毛との懇談（7.4）で怠惰・腐敗を免れない歴史に触れ，興亡「周期律」の克服策を問うた。毛は人民が政府を監督する民主で打破できるとしたが，建国7年後この「新路」を棄てた。「8大」提起の中共と諸民主党派の「長期共存，相互監督」は，9ヵ月足らずで崩れた。

同行の章伯鈞は1957年，独裁を防ぐ「政治設計院」の提言で「右派」No.1とされ，翌年1月31日，要職（交通相・政協副主席・中国農工民主党主席・中国民主同盟第1副主席）を失った。「文革」勃発3周年の翌日（1969.5.17）の病歿は，失意の儘でも翌月の賀龍の虐待死に勝る。但し18歳年下で同じ誕生日の李劫夫の名誉回復と違って，彼は今だに再評価を許されない。

「平反（名誉回復）委員会」設立を唱えた羅隆基（民盟副主席・森林工業相）も同日に解任され，

羅瑞卿の欠席裁判の前夜，国民党の迫害も含む苦難の人生を終えた（1896.7.30～1965.12.7）。「党天下」を喝破した儲安平（1909.11.5 生）は，光明日報編集長を章社長と共に免職された。九三学社中宣部副部長も解かれた彼は，「文革」初の自殺未遂（1966.8.31）直後に姿が消えた。

「3 大右派言論」で有名な章・羅・儲を含む「5 大右派」に，上海の彭文応・陳仁炳も居る。彭（民盟市副主任委員）は 7 月 19 日，『解放日報』（中共市委機関紙）で「反共」と指弾された。当日に妻鄧世榕が衝撃で急逝し（歿年 44），次男志平も後に自殺した（1961.12.20，同 19）。労働改造を強制され妻子を喪った彭は，病弱・老衰の加速で夭逝した（1904.6.27～62.12.15）。

彼の逝去の日に 53 歳と成った陳（同）は，同紙の攻撃を「反右」開始の当月に受けた（6.28）。毛は翌月 9 日の訓示で北京を右派の発祥地とし，彭・陳等 5 人の上海勢をも標的に挙げた。陳は「文革」後に歴史学教授に復職したが，歿（1990.12.9）後も名誉回復を得ない儘である。中央指定（1980.6.11）の 5 人は「右派分子」（552973 人）の内，再評価不可（96 人）とされた。

「12.30」通告，「12.31」専断，「12.18」発信

毛が章・羅に次ぐ右派の元祖と断じた章乃器は，当日（7.9）上海の『文滙報』で批判された。黄炎培と共に民主建国会を創った彼は，反体制派として食糧相を解かれた（1958.1.31）。過激な言動が少ない為か，生前（1897.3.4～1977.5.13）出来なかった名誉回復は死後実現した。丁稚（でっち）上げの「章（伯鈞）羅連盟」の陰に在る薄い存在感も，僥倖（ぎょうこう）の結果の 1 因かも知れない。

「反右」は陣頭指揮者鄧小平の意志で，「文革」後も完全に必要で正しいと結論付けらた。名誉回復は拡大化への是正だと言うが，0.017％の処分維持と無謬性の主張は矛盾が大きい。3 千人を誤って殺してでも 1 人を逃すな，という国民党の冷血を現す号令が語り草と為る。「右派分子」の正・誤判定の 1 対 5759 の大差は，中国流の誇張に多い 3 千の 2 倍に近い。

民主建国会（1952,7.7 改称，「中国」を冠す）の成立日（45.12.16）は，特に深い意味が無い。30 周年の日の康生死去と丸 12 年前の羅栄桓逝去から，歳末の終末的な形象を実感できる。「5 大右派」の死亡日確定の 4 人中 3 人が 12 月に歿し，儲も失踪した 9 月とは限らない。毛が特別に参列した羅の葬儀の 22 日と康の追悼会の 21 日は，節目の冬至の辺りに在る。

最大「野党」の中国民主同盟は，中国民主政団同盟（1941.3.19 創設）の改称（44.9.19）である。中央も末端も広く打撃された民盟を始め，諸民主党派は「反右」で徹底的に抑圧された。更迭・処罰が多い 1 月の末に前出の 3「右派」閣僚が解任され，脱民主党派・人士が一層進む内閣改造（1958.2.11）で，無党派の教育相張奚（けい）如（政治学者，1889～1973.7.18）も交代された。

黄炎培夫人自殺の恰度 6 年前（1962.1.20），彭応文は次男の位牌を作り英文の弔辞を記した。彼の自殺は翦伯賛夫妻と同じ冬至前で，未遂（1960.3.18）は 6 年後の羅瑞卿と同日である。章乃器は「文革」中に紅衛兵の殴打で重傷を負い，警察の干渉で死地を脱した（1966.8.24）。

同じ日の老舎・李達の死と合せて，「紅色恐怖」の同時多発や日付の史縁・天数を思わせる。

「右派分子」王若望・方励之・劉賓雁は名誉回復後，「反自由化」で再び党から除名された。「反右」30 周年（1987）の劈頭の 3 識者処分は，毛沢東の「大右派」打倒を彷彿させる。鄧小平は前年の 12 月 30 日に胡耀邦等を呼び集め，「学潮」を封じ込む方針を通告した。1 月 4 日に同じ私邸で胡以外の要人の会合を開き，党首辞任で波乱を鎮める意向が固まった。

22 年前の年末（1964.12.31），毛は超法規の行動で本気の劉少奇放逐の 1 歩を踏み出した。党内配布済みの農村社会主義教育運動関連の中央通達（12.28）の破棄を，彼は独断で命じた。その意に沿わない中央工作会議も終了（同）に関らず，鶴の一声で追加開催された（1.6～14）。劉の主導で確定された 17 条通達は再審議の末，毛の方針に沿う 23 条に書き替えられた。

会議期間中に朱徳・賀龍等が劉に対して，大局への配慮と毛への尊敬・謙譲を要請した。劉は 13 日に党内生活会（周恩来等 16 人参加）を招集し，率直な批判・自己批判を交した。会議後に劉は関係修復の為に毛に反省を述べたが，毛は矛を納めつつも不信を抱き続けた。翌年『司令部を砲撃せよ』で糾す劉の罪状は，1962 年の右傾と 64 年のこの過誤である。

毛は 1970 年 12 月 18 日，旧知のスノー（米国の報道人（ジャーナリスト），1905.7.17～72.2.15）と会見した。劉を政治的に倒す必要性を明確に感じた時期が訊かれると，23 条通達を作る頃だと答えた。彼は林彪が進めた自分への個人崇拝に嫌悪を表し，林外しの信号（シグナル）を全党に向けて発した。当日は翦伯賛夫妻自殺 2 周年に当るが，翦も 1965 年に毛認可の批判を浴び最後に滅びた。

「57～59」受難，「1.3」訓戒，「1.16」逼迫

「右派分子」の万人単位の 55 は，毛の超法規逮捕命令第 1 号の西暦年の下 2 桁である。拡大化の「正」誤倍率の 4 桁は，「反右・大躍進・反右傾」の同 57～59 年を連想させる。為政の狂奔は反右論説の執筆（1957.5.15）に始まり，9 年後の「文革」発動（5.16）に重なる。経済の冒進は同年の冬至前後の準備を経て，翌年の小寒～大寒間に本気の助走へ突入した。

毛は華東 6 省市第 1 書記会議（1957.12.16～18，杭州）で点火を図ったが，不発に終った。年明けの続行（1.3～4）で周恩来を叩き，名指しの点で丸 7 年後の劉少奇批判よりも厳しい。同月の中央工作会議（11～22，南寧）でも，5 日間に亘って周等の「反冒進」を責め続けた。周・劉は凄まじい剣幕に屈して，19～20 日（未明）の会議で「過誤」の責任を認め謝った。

毛は 16 日の会議で，柯慶施（上海市委第 1 書記兼市長，1902.10.10～65.4.9）を讃え周を貶めた。柯の意気盛んな演説（前年 12.25，市党大会にて）を持ち出して，総理はこれを書けるか詰問した。辱められた周は政治局に留任の当否を伺い，慰留された（6.9）ものの実権を削がれた。29 年後の「1.16」胡耀邦辞任と対照的に，彼は超絶の能力・処世術で任途を全うした。

毛は 9 歳年下（56）の柯を「柯老」と呼んで尊び，8 期 5 中全会（5.25）で政治局入りさ

せた。柯は副総理就任後の死と左傾の不評で，同期政治局委員 20 人中唯一朝野の伝記が無い。彼は 1942 年後半「特務（スパイ）」容疑が掛り，新妻（曾淡如，生年未詳）も翌年初に冤罪で自殺した。それでも党に忠誠を尽し毛への盲目的崇拝を唱え，毛時代の中共要人の 1 典型と成る。

南寧会議後の全人代 1 期 5 次総会（2.1～11）を前後に，民主人士閣僚が多く解任された。初日の 16 年前に毛の号令（中央党校の始業式にて）が口火と成り，延安で整風運動が始まった。方法改善の「3 風（学風･党風･文風）整頓」は，忽ち「搶救（救済）運動」の粛清に変質した。1967 年「2 月逆流」で陳毅が虎の尾を踏んだのは，当時の被害の遺恨を口走った為である。

彼は延安で総理と自分を批判した劉少奇・鄧小平・彭真等に，積年の怨念を吐き出した。彼等は最も主席を擁護し故に重用されたが，主席に反対するのは結局彼等だと怒鳴った。毛がこれを聞いて色を作（な）したのは，延安整風は党首就任の踏み台と成る聖域だからである。「文革」中の劉・鄧・彭等の失脚への言及も，順次粛清を行う毛の後ろ目痛（た）い処を衝いた。

陳が同時に挙げた薄一波・劉瀾涛・安子文は，翌月 16 日に中央から裏切り者と断罪された。1936 年，劉少奇･柯慶施が幹部の不足を補う為，獄中の人材の釈放を図る策を提案した。中央の承認と責任承諾に由り，61 人の中堅が反共声明の発表と引き換えに帰還した。1 度も問題に成らなかった必要悪の計謀は，劉を撃つ壊滅的な「砲弾」として悪用された。

薄一波（副総理）は 1967 年 1 月 3 日から，8 年間「監護」され 4 年間「管制」下に置かれた。妻胡明（第 2 軽工業部工芸美術局長）は，紅衛兵の連行で帰京中に自殺した（1919.10～67.1.15）。桃園に義を結ぶ蜀の 3 豪傑は，同年同月同日の生は無理でも同年同月同日の死を望んだ。夫婦は同じ運命の鳥ながら別々に飛ぶと言うが，丸 40 年を隔てた同月同日歿は奇観である。

「61 人叛徒集団」の筆頭の薄と同様，2 位の劉瀾涛（西北局第 1 書記）も 8 年間囚われた。妻劉素菲（1914～67.12.31）の自殺，30 年後の同日の死去（1910.11～97.12.31）までも似通う。3 番目の安子文（中央組織部長）は，投獄（秦城，1968.1）後に安徽淮南市に下放された（75.5）。「叛徒集団」冤罪の名誉回復（1978.12.16）後，復職の翌年に物故した（1909.9.25～80.6.25）。

数奇の重畳（ちょうじょう），「10 景」大全，「3.15」呪縛

陳毅が延安整風の主流派として挙げたこの 3 人は，翌月「叛徒集団」の 1～3 位にされた。薄・劉の妻が同年に自殺し当人が丸 40・30 年後に歿したのは，小説より奇たる天数である。劉素菲の死は毛沢東が中央通達を廃した 3 年後，安の命日は朝鮮戦争勃発 30 周年に当る。中央の無実認定は康生歿 3 周年に巡り合せ，康は延安粛清と「61 人案」の元凶である。

中組部の調査結論提起（1978.11.20）の 2 年後，歴史清算の林彪･江青集団裁判が始まった。判決日の 2 年前（1979.1.25），中央主催の被害死者 5 人の名誉回復・追悼儀式が行われた。職位順で 1 番目の廖魯言（農業相，1913～72.11.19）は，61 人の先頭の数人に入らない。薄等

3 人と 4 位の楊献珍（元中央高級党校校長，1896.7～1992.8.25）の延命が，浮彫にされる。

次の徐子栄（公安部常務次官，1907 年生）は逮捕（67.1.5）後，賀龍と同月に獄死した（69.6.20）。胡錫奎（西北局書記処書記，1896.11.7～1970.10.23）は獄死後，匿名の荼毘（だび）で遺骨も消え去った。劉錫五（中央監察委員会副書記，1904.7.12～70.2.28）は，「幹部学校」の労働改造中に死去した。王其梅（西藏自治区委書記処書記，少将，1913.12.27～67.8.15）も，早い病死で迫害が軽かった。

1932 年に廖・徐と一緒に投獄された馮基平（11 年生）は，3 年後病気治療の為に保釈された。建国後，北京市公安局長（初代羅瑞卿の後任）・市委書記兼副市長（基本建設等担当）を務めた。「文革」勃発の翌月から秦城監獄に囚われ，9 年の虐待に耐えて復活した（1983.9.29 歿）。彼は徐と共に建設を仕切った監獄で，自分も入る事が分ればもっと立派に作ったと嘆いた。

毛沢東はスノーとの談話で，俘虜を虐待しない軍の伝統に反する身体的迫害を批判した。彼は丸 2 年後（1972.12.18）の書面訓示で，ファシズム的な査問方式の一律廃止を厳命した。改善令の契機は，秦城監獄を出た劉建章（鉄道部次官，1910.3～2008.2.14）の妻の苦情である。馮基平の監禁は劉（1968.2～72.6）の 2 倍強に当り，内 4 年半も手錠を掛けっ放しであった。

馮も関った首都建設の「文革」前の最高傑作は，建国 10 周年を祝賀する 10 大建築である。古来朝野が好む「十景」の現代人工版（人民大会堂・中国革命と中国歴史博物館・中国革命軍事博物館・全国農業展覧館・北京駅・北京工人体育場（スタジアム）・民族文化宮・民族飯店（ホテル）・釣魚台国賓館・華僑大厦（ホテル））は，「大躍進」最中の 1958 年 9 月から突貫設計･工事を進め，驚異的な速度で完成した。

同年に都市建設相から副市長に転任した万里（1916.12～2015.7.15）が，大工程（プロジェクト）を指揮した。彼は「文革」初の失脚後 1971 年に復帰し，「文革」後に副総理・全人代委員長と成った。大会堂建設で頭角を現した木工青年突撃隊長李瑞環（1934.9.17 生）は，より大出世した。万と並ぶ政治局入り（1987）を経て常委（89～2002），全国政協主席（93～03）を務めた。

李は北京市建設委員会副主任在任中（1976.11.9），毛主席記念堂建設工程総指揮に任命された。華国鋒主席就任（「4 人組」逮捕直後の 10.7）の翌日，正統性の顕示を兼ねて建設が決定された。定礎式（11.24）から落成（歿 1 周年の 1977.9.9）まで，李は再び国家工程で敏腕を振った。前任の政協主席李先念も大工であったが，労働者出身の中共指導者は意外と少ない。

10 大建築と同年に建て始めた秦城監獄は，公安相羅瑞卿が 1955 年に手掛けた工程である。彼は 10 年後の失脚で単独拘束を 7 年受け，妻郝治平（1922 年生，上佐）が秦城に投獄された。「彭羅陸楊反党集団」の陸定一も妻と共に入り，落成 26 周年時の妻の死は呪縛が窺える。金敬邁（軍人作家，1930.8.17～2020.3.15）も，7 年余り居た監獄の還暦の日に命が尽きた。

「8.15」放送，「6.26」内戦，「4.23」崩壊

委員長が万里→喬石（1924.12.24～2015.6.14）に替った第 8 期全人代は，初回総会（93）の

開幕も最終回（98）の閉幕も「3.15」である。第3・4回の「3.5」開幕は李鵬（1928.10.20～2019.7.22）委員長の期から定例化した（父碩勳［1903.2.23～31.9.16］が敵に処刑された後，面倒を見た周恩来の誕生日を意識した表敬も兼ねるか）が，第3～5回（2000～02）は「3.15」に閉幕した。

第10期（委員長＝呉国邦［1941.7.12生］）の5回の閉幕は，18・14（3年連続）・16日である。次期（同）の18・13・14・16・14日は，同じく「3.15」が無いが平均が恰度15日と為る。第12期（同＝張徳江［1946.11.4生］）は，平均にも近い15日が2回有る（17・13・15・16・15）。第13期（同＝栗戦書［1950.8.30生］）の正常開催の2回も，遅めの20日の次に15日が出た。

第3回（2020）は厄病流行で延期し（2.24決定），5月22～28日の挙行と成った（同4.29）。5月下旬の「大躍進」「文革」発動の会議を連想すれば，季節外れの変則は混乱を思わせる。通例開幕・短縮の第4回（2021.3.5～11）の閉幕は，第1・2回との平均が又15日頃である。次回も「3.5」に始まり（前年12.24決定），閉幕日（未定）は既成の軸から余り外れないか。

5日の開幕なら切りが好い15日の閉幕，切りが好い10日間（～14）の会期が自然である。2009・14年（倶に当期第2回）の13日閉幕は，前年の18・17日と対を成して均衡が取れた。その日程は意図の有無に関らず，60・65年前の中共7期2中全会（河北平山県）と一致する。現代中国史上の3月5日の重要な出来事には，建国前夜のこの会議の開幕が先ず思い浮ぶ。

日・中共通の20世紀の最重要放送は，日本戦敗の宣言・速報（1945.8.15）に他ならない。敵国の降伏と自国の光復に由る幸福も長く続かず，翌年6月26日に全面内戦が再起した。中共の中原軍区が根拠地を包囲する国民党軍に対して，突破作戦を発動し戦火を拡げた。李先念司令・王樹声副司令兼第1縦隊司令の建国後の重用は，先陣を切った戦績にも由る。

国民党は兵力の優勢と米国の支援に頼って，攻勢を強め延安占領（1947.3.19）に至った。5日後に中共は国民政府軍第18集団軍の番号使用を止め，人民解放軍総部の名称を用いた。辛亥革命記念日・中華民国国慶節の10月10日に，『中国人民解放軍宣言』が発表された。蒋介石打倒・全国解放・民主連合政府樹立の呼び掛けは，翌年に猛然と現実味を増し続けた。

1年前の国軍の張家口（中共の晋〈山西〉察〈察哈爾（チャハル）〉冀根拠地の首府）占領（10.11）と反転して，解放軍は遼（寧）瀋（陽）戦役（1948.9.12～11.2）の勝利で，初めて強弱・多寡を逆転させた。淮海戦役（11.6～翌年1.10.）・平津（北平［京］・天津）戦役（11.29～1.31）後，遂に勝敗が付いた。蒋介石は初の全国戒厳令の発布（12.10）後，中共の和議拒否で総統辞任に追い込まれた（1.21）。

延安奪回（1948.4.22）の1年後の首都（南京）制圧（49.4.23）で，国民党の統治は崩壊した。毛沢東は直前の7期2中全会で，活動の重心を農村から都市に移す等の建国方針を示した。全国的な勝利を勝ち取る事は万里長征の第1歩を踏み出したに過ぎない，とも語った。謙虚・慎重で驕らず焦らず，刻苦奮闘の作風を引き続き保持しよう，という名言も歴史に残る。

胡錦涌は総書記初当選の20日後，書記処書記全員を率いて会場址（あと）の西柏坡村を訪れた。異例の合宿学習・考察（2002.12.5～6）は，中共政権の初心を貫く決意の表現と見受けられる。

10 年目の全人代全会閉幕日（2012.3.14）に，温家宝は「文革」再来の危険に警鐘を鳴らした。直後の薄熙来の失脚は図らずも，生れる 4 ヵ月近く前の毛の注意喚起の先見の明を証した。

「12.1」三反，「2.10」自滅，延安「5 老」

毛は勝利から生じた傲慢や功臣を自任する態度，進取を止め享楽を貪る気分を戒めた。糖衣で包(くる)んだ砲弾の攻撃の危険性に対する指摘は，建国後 2 年余りで次々と実例が現れた。汚職・浪費・官僚主義反対運動（1951.12.1～52.10.25）で，党内外の不法行為が沢山摘発された。「打虎」（虎［汚職犯罪者］退治）の厳罰で 41 人が処刑され，大勢の対象者が処分を受けた。

巨悪の劉青山（石家荘市委第 1 副書記，1916 年生）・張子善（天津地委書記兼専区専員，14 年生）は，敵の監獄で厳刑に屈さず節操を現したのに，権力の腐蝕で巨額の横領・汚職に走った。河北省委に由る党籍剥奪（1951.12.4, 30 日公表）に続いて，公開裁判・処刑が行われた（52.2.10）。極刑は省委・華北局・中央書記処で審議され，毛の決裁で情状酌量不可・陳情禁止と為った。

48 年後の 2 月 10 日，前々日に遺書を認(したた)めて睡眠薬で自害した姫鵬飛は息を引き取った。独り子勝徳（総参謀部常務副部長，少将，1948 年生）が収賄・汚職で死刑（猶予付き）が内定され，彼は自分の功労に免じて極刑を免れるよう方々嘆願したが，当然な拒否に遭って絶望した。翌年・翌々年の 1 審・終審判決（上記量刑→無期懲役）を見ず，浅慮の衝動で晩節を汚した。

劉・張事件の調査・処理を仕切る楊秀峰（省政府主席，1897.2.27～1983.11.10）は，1954・58・64・65 年に高等教育相→教育相→高等教育相→最高人民法院院長（最高裁長官）に転任した。教育・裁判を司る職は元教授・法学者に似合うが，「反右」後 2 分野とも党の管制が厳しい。人民代表大会は中共の決定を追認する護謨(ゴム)判と見られ，独立し得ない司法も同様である。

省委 No.1（書記，1956 年より第 1 書記）の林鉄がソ連で病気治療中，故に楊が対処に当った。慣用語の「党紀国法」の優先順位の通り，省委処分後に政府調査処理委員会が組成された。省委は死刑の意向を華北局に報告し（12.14），同局は中央に処理案を上申した（20）。その建議（死刑或いは猶予 2 年付き，省政府の政務院への指示要請を経て執行）も，司法軽視の嫌いが有る。

毛沢東は中央書記処拡大会議を招集し（29），省委の建議に同意する中央決定を纏めた。省人民法院（地方高裁）判決→最高裁確認・批准→死刑宣告・即日執行，という手順に成った。3 権分立と無縁の中共治下の裁判所は，党→政 / 軍の裁定の体裁を整える装置に過ぎない。建国 30 年目に漸く出来た刑法も，建党記念日（1979.7.1，58 周年）の制定に深意が隠れる。

最高人民法院院長は初・2 代目の沈鈞儒（民盟の要人，1875.1.2～1963.6.11）・董必武の次に，謝覚哉（1884.4.27～71.6.15）が 75 歳の誕生日（劉少奇国家主席初当選の日）に就任した。彼は董・林伯渠・徐特立（同じ教育家，1877.2.1～1968.11.28）・呉玉章（同，1878.12.30～1966.12.12）と共に「延安五老」と並称され，習近平の延安縁を現す如くその成人（満 18 歳）の日に歿した。

次の楊秀峰は劉主席再選の日（1965.1.3）に任命され，「文革」末に再開した全人代総会（4期初回，75.1.13～17）で江華（瑶族，07.8.1～99.12.24）に替った。建軍の丸20年前に生れた彼は在任（～1983.6.20）中，林彪・江青集団裁判の特別法廷廷長（裁判長）を務めた。元浙江省委第1書記（習書記の8期先輩）の彼も「文革」被害が軽く，最高裁長官安泰の歴史に寄与した。

判決は中央の特別裁判指導委員会が政治局に判断を仰ぎ，宣告前に党内外に内示された。江の死刑･即刻執行を望む民意に対処した説明は，党が法を支配する実態の露出を憚らない。姫勝徳を裁く軍事法廷（軍法会議）の判決も，軍・法の指揮権を握る党の政治局が決裁した。法の番人は伝令係だから最高裁長官は失脚し難く，董を除いて在任中の政治局入りも無い。

「4.10」失脚，「4.9」収監，「8.31」打倒

官製毛沢東伝の劉･張事件の詳述（2頁）は，薄一波（時の華北局第1書記）の感慨で結ぶ。彼は1997年の回顧録で「三反」の経験を総括し，中央の腐敗一掃の決意・気魄を讃えた。後に党は腐敗懲罰の決心を何度もしたが，寛大過ぎて然る当き効果を得ていないと省みた。皮肉にも15年後，次男夫妻の汚職や殺人に対する判決も一部の大衆から緩いと見られた。

改革・開放元年生れの刑法の改定（1997.3.14）15年後，温家宝が薄熙来批判の先鞭を付けた。翌日に落成52周年を迎えた秦城監獄は，薄の司法機関への移送（9.28決定）先と成った。蹉跌の第1歩（政治局委員･重慶市委書記停職）の4月10日も，天数で彼を秦城監獄と繋げる。江青が地下の秘密基地から其処（そこ）に移送されたのは，35年前の同日の深夜1時頃である。

「4人組」の拘束半年余り後の移送は，1977年4月9日の同時刻の王洪文が最初である。次は序列順の様に，張春橋（元政治局常委･副総理･軍総政治部主任，1917.2.1～2005.4.21）と為る。翌日は江青（元政治局委員）に続いて，姚文元（同，1931.1.12～2005.12.23）が最後に入った。「中央文革」第1副組長・成員の江・姚の入獄日は，2012年の薄の失脚で天啓が感じられる。

「中央文革」副組長の王任重・劉志堅（総政治部副主任・全軍文革領導小組組長，中将，1912.1.23～2006.3.11）は，陶鋳顧問の8日前・同日に失脚した。初期成員中6人が王力・関鋒より早く，1人が戚本禹より早く失脚した。「9大」直後の解消時の5人は，陳伯達組長・康生顧問は政治局常委（5人中4・5位），江・張副組長と姚は委員に成ったが，後に悉く失脚した。

陳伯達は毛沢東の歴代秘書37人の内，江青と共に延安時代から「文革」中まで兼務した。生歿（1904.7.29～89.9.20）が近い林鉄（04.11.20～89.9.17）と対照的に，出世が速く浮沈も激しい。建国～「文革」の河北省委No.1林は中央委員成った（1956）が，病弱で実績が乏しい。党首側近の陳は逸早く，中委候補（1945）→委員（49）→政治局委員候補（56）と昇進した。

「大躍進」発動の9日後（1958.6.1），党中央理論誌『紅旗』が創刊され陳が編集長を務めた。当日は国際児童節（こどものひ）（1925.8，児童福祉国際会議制定）に当るが，時の毛の執政は児戯に等しい。

8 年後の同日，『人民日報』社説『妖怪変化を一掃せよ』で「文革」の狂気が噴出した。前日に中央工作組（ワーキング・グループ）を率いて同紙を支配した陳の主導が，「文革」後その罪状に入った。

林鉄の満 50 歳の年・月日と重なるが，国連総会（1954.12.14）が加盟国に制定を勧告した「世界子供の日」は，『児童の権利に関する宣言 / 条約』採択（59/89）の「11.20」が知れ渡る。中共政権は当初から「6.1」（建国の翌月の国際民主婦人連盟決議に拠る）を採用したが，30 年後の「11.20」に林彪・江青集団裁判が始まり，「6.1」縁の陳は懲役 18 年に処された。

彼は江に反発して林に接近し，9 期 2 中全会（1970.8.23～9.6）で公然と結託した。毛は一味の張春橋「砲撃」を許さず，往年の「彭黄張周」に続いて廬山で失脚者が出た。陳は毛の『私の一寸（ちょっと）した意見』（8.31）で直ちに倒され，囚われた。後に刑期満了（長征開始 54 周年の 1988.10.17）を待たず，毛の劉少奇「砲撃」15 周年（81.8.5）に治療の為の仮出所が出来た。

彼が別の監禁先から秦城に移されたのは，林彪夫妻が未明に変死した日である。粗末な独房に入れられた途端，虐待死の予感から看守に絶叫した。「毛主席に伝えてくれ！私は阜平で好い事を 1 つしたのです！と」。爆撃から毛の命を助けた事を暗に指す伝言は，此処で死んだ傅連暲の命乞いの恩着せがましさが無く，直ぐ以心伝心の効果を得て特待室に変った。

「7.10」爆発，「1.13」訣別，「5.19」散骨

全人代総会開幕 1 回・閉幕 7 回の「3.15」は，秦城監獄→薄熙来の連環でも閉幕 5 回の「3.14」と繋がる。3 回の「3.16」も 1969 年の開封市火葬場火葬申請書の番号「316」を通じて，劉少奇の死（11.12）と火葬（14 日 0 時）の中間日の 42 年後の薄夫人殺人事件と重なる。「劉衛黄（若い頃の字（あざな））」「無職」の記入は，全て奪われ本名も明かせない悲惨さを物語る。

劉は反袁世凱（1859.9.16～1916.6.6］）闘争の中で，字「渭璜」を変えた（同音の weihuang）。袁（民国初代大統領［1913.10.10～15.12.12］）の復辟（中華帝国樹立・皇帝即位）は失敗した（16.3.22）が，「衛黄」の寓意と成る「炎黄子孫」（炎帝・黄帝の子孫。中国人の雅称）を衛（まも）る事は皮肉にも，伝説上の中華民族の最古の両帝の「両雄不並立（ならびたたず）」（決戦で黄帝が勝利，炎帝が敗北）を思わせる。

毛沢東は頂上政争元年（1953）に劉下ろしを企み，彼が唆（そそのか）した高崗の力不足で不発に終った。国家主席を明け渡した劉の権勢の膨脹に，領袖の尊厳から嫉妬・警戒・憤慨を抱いた。1961 年 3 月に劉を広州へ呼ぶ際，日程調整に難色を示されると激怒し強引に譲歩させた。翌年 7 月 10 日に劉は彼に失政の責任を詰（なじ）り，互いの憤懣の爆発が劉失脚の火種に成った。

71 歳・湖南出身の記載は正しい（満年齢 70 = 数え歳 71）が，間柄が父子と成る申請人「劉原」は，劉源（第 7 子・4 男，1951.2.22 生）の名義の無断使用で，8172 部隊（「監護」担当の第 1 軍）所属と自筆署名も専（門）案（件）小組（グループ）の偽造である。当人は山西山陰県の農村に下放され（1968～75），72 年に父との面会の許可を毛へ乞うた処，返信で初めて訃報に接した。

劉は毛の『砲撃』執筆日から職務活動を停止させられ，全会公報（コミュニケ）の言及が無い儘「8.18」集会で6位もの降格を曝された。「8.5壁新聞」の1周年時に天安門広場で100万人の記念集会が開かれ，劉夫妻は公邸で造反派に批判・殴打された。其処で永訣の握手・凝視を交した2人は別々に軟禁され，王光美が一足早く秦城監獄に投じられた（陳伯達の4年前の「9.13」）。

劉の2番目の妻何宝珍（1902～34.12）は国民党の監獄で処刑され，両者の長男允斌（いん）（劉の第1子）は王（6番目の妻）の入獄後に自殺した（11.21，歿年42）。王所産の4子中の一番上の平平（第6子・3女，1949.5.13～2009.12.3）も，母親に付けられた「米国の間諜（スパイ）」の様な罪名が無いのに，翌年に北京衛戍区の監獄にぶち込まれ，1年半後に釈然としない儘に釈放された。

林彪事変の翌年，秦城監獄で彭真の家族接見が許された事を受けて亭亭が毛に懇願した。宋慶齢に託された嘆願書への返事は，「父親は已に死に，母親に会うが可い」と認（したた）めた。「8.18」紅衛兵百万人集会の6周年時に再会できたが，王も前日に初めて夫の死を知った。劉の死は毛の存命中に厳重に秘匿され，名誉回復の中央決定（1980.2.24）で漸く公表された。

劉はやっと漕ぎ着けた毛との面会（1967.1.13）で，辞職の意を表し「文革」の収拾を願った。丸2年前の生活会で毛への不敬を反省した彼は，今や地位よりも生命の保障を求めた。延安で農民に成る申し出は昔の雌伏を連想させ勝ちで，それが無くても放免は有り得ない。

両者は人民大会堂の118庁（間）で最後の訣別をしたが，由来未詳の番号は神秘性を持つ。劉の開封移送（1969.10.17）は対ソ戦備緊急疎開の一環で，林彪も同日に江蘇蘇州市に行った。長征開始35周年に巡り合せたのは，中共の歴史に於ける戦争や危機の頻出を思わせる。劉の生誕79周年の日の毛主席記念堂定礎式は，両主席の相生相剋の象徴として興味深い。葬儀・散骨（1980.5.17・19）は「文革」発動14周年の翌日・首都戒厳令発布の9年前に当る。

「8.23」異論，「8.24～25」反乱，「10.18」号令

長征発40周年時（1974.10.17）の政治局例会で，鄧小平が江青等と舌戦し憤然と席を蹴った。彼を第1副総理に昇格させる毛の意向（10.4）が，「4人組」の不服で政争を激化させた。長沙（湖南省都）に病気療養（10.15～翌年2.3）中の毛の支持を得る為，双方が猛然と競合した。王洪文が早速（さっそく）翌朝に秘かに飛んで行き，周恩来等の組閣は不正常で危ない等と直訴した。

彼が放った殺し文句は，今の北京では70年廬山会議の「味道」（臭（にお）い）が大いに有ると言う。9期2中全会の2～3日目（8.24～25），林派が張春橋打倒の奇襲を掛けた事を指す。組織的・計画的に一斉に反旗を翻した事は，派閥活動や高官の秘密連携を禁じる掟（おきて）に反した。毛は建党来未曾有の全会大乱を鎮める為，25日に6組（広域分科会）休会（26～30）を命じた。

林は開幕式で憲法改正に関する臨時の大演説をし，国家主席の復位と毛の就任を切望した。康生も毛・林の正・副主席体制に賛成し，毛が断るなら林に主席に成って貰（もら）おうと述べた。

前日の政治局常委会で林・周・陳（伯達）・康とも，主席復位を要請する民意に同調した。
毛は反対の持論を席上繰り返した故，林の主張も自分に忠実な康の賛意も気に食わない。

毛は第4期全人代開催・憲法改正の意見（3.8）で，既に国家主席を設置しないと明言した。
林の毛就任の提言（同・翌月）はその都度斥けられ，「文革」以来2人は初めて対立した。
彼は儀礼的事務を嫌うから劉少奇に譲ったが，集権の為に劉と共に職位も廃止が好ましい。
然し5常委中4人が異論を唱え，腹心の汪東興・中央警衛団（連隊）も林と同じ意向である。

毛は1964年末に会議で憲法の冊子を取り出して，言論の自由を劉に封じられた様に訴えた。劉も『砲撃』「壁新聞」1周年時の批判会で同じ手を使って，国家主席の尊厳を主張した。
憲法を踏み躙る迫害・破壊に止まらず，自分の都合で元首職位を消すとは恣意的過ぎる。
彼の固辞で林に転がる事を期待する向きも有ったが，復位と毛就任は大勢が望む所である。

「9大」採択（1969.4.14）の党規約に，林は毛の親密な戦友と後継者であると明記された。
世界の革命党史上に無い可笑しい規定は，江青が長征発34周年時（1968.10.17）に首倡した。
賛同した張春橋は左傾理論家として毛に好かれ，林に次ぐ後継者とする腹積りまで有った。
毛は蘇州に出向いて林に打診した（1970.4.25）が，朝鮮の建軍節は19年後も政局に絡んだ。

林は毛に随き従った将軍等を後継者群の例にしたが，彼は長男を自分の後継者に据えた。
空軍入隊（1967.3）後，司令部辦公室（事務局）副主任兼作戦部副部長に抜擢させた（69.10.17）。
空軍の全権を彼に与えた呉法憲司令（副総参謀長・政治局委員，中将）は，「9.13」後に失脚した。
刑期17年未満で秦城監獄を出た（1981），破格任命の35年後（1915～2004.10.17）に歿した。

長征出発35・70周年に巡り合せた2つの事でも現す様に，至る処に史縁が見られる。「第2の毛」習近平の党首1期目の最終日の党大会閉幕は，毛の長男岸英の生誕95周年に当る。
岸英の戦死と弟岸青（1923.11.23～2007.3.23）の精神疾患で，毛は息子の後継が抑々出来ない。
林立果は23歳で軍の要職に就き翌年「天才」と宣伝されたが，毛の癪に障った筈である。

林彪は蘇州に疎開した翌日，ソ連の侵攻に備えて全軍が緊急戦備状態に入るよう命じた。
「林副主席指示（第1個号令）」（総参謀部の命名）は，翌日に武漢疎開中の毛に報告された。
1個中隊の異動も軍委主席の許可が要る規則を破った挙動は，毛の強い不信・警戒を招いた。
長征勝利34周年に当るその日（10.19），彼は立腹の余り電話記録の速達を即座に焼却した。

独断で全軍を動かした林の実力は，新中央の軍人の高い比重（49%）と共に脅威を成した。
毛は林の協力で劉少奇を倒した後，もっと厄介な相手に手を焼き自縄自縛の苦汁を呑んだ。
廬山で絶体絶命の張春橋が姚文元と共に，彼の腿に縋って慟哭しながら助けを哀願した。
寵臣の窮状に権威失墜の恐れを痛感した毛は，「2月逆流」鎮圧以上の鉄腕で消火に掛った。

彼は「2月逆流」でも江青・張・姚等の急報を聞いて，古参組叩きを決意したのである。
廬山の「8月反逆」は，「紅色恐怖」最高潮の「8.24」（老舎・李達歿の日）の4年後に起きた。
4年後の秋に江一味は3匹目の泥鰌を狙ったが，「文革」の終息を図る毛に撥ね返された。

彼は安定志向から王洪文の裏工作を叱り，周恩来を信頼し鄧小平を重用する方針を示した。

周は全人代・国務院人事構想を携えて，癌に侵された病軀を押して長沙に飛んだ（12.23）。毛は24～27日に彼・王（別便で同日到着）と面談し，周・鄧体制の確立を承認した。中央1975年1号文書（1.5）で鄧は軍委副主席兼総参謀長に，張春橋は総政治部主任に任ぜられた。10期2中全会（1.8）で周建議・毛了解の増補として，鄧は政治局常委・副主席に選出された。

「8.25」逆転，「8.7」軍先，2度「特待」

1970年廬山会議開幕の前日（8.22）は，英国代理大使事務所焼討事件の3周年に当る。常委会で毛が極少数派に成った事は，「文革最狂期」（1966.8～68.8）の制御困難を想起させる。彼は3日後に主導権を取り戻し，周恩来・康生の協力で反逆を瓦解させ陳伯達を追放した。3年後の同じ頃，林・陳一味と李雪峰（陳の騒ぎを拡散させた華北組組長）が永久に除名された。

処分（8.20）の翌々日の政治局会議で，毛・周の主導で第10期最高指導部の人選が決った。毛は周・王洪文を1・2位の副主席とし，王への広汎な不服に対して説得調で庇った。兵隊・農民・労働者の経験が有り，「児童団」（若者の譬え）を軽く見ては為らん，と諭（さと）した。康生・葉剣英も入れようと言った後，老・中・青結合の原則を提起し中年が無いと指摘した。

老年（60歳超）組（毛79，周・康75，葉76）に対し，王（38）は青年（40未満）に算（かぞ）えられた。毛は空かさず軍から中年層を選ぶと決め，江青・張春橋・姚文元（59・56・42）を除外した。周は得意の忖度（そんたく）で，李徳生（総政治部主任・北京軍区司令・政治局委員候補，少将，57）を薦めた。李は恐縮し李先念（64）が相応しいと申し立てたが，毛の承認と満座の賛成で内定された。

李に対する毛の別格処遇の由来は，第12軍軍長として安徽の武闘を鎮めた功績である。毛の「銃から政権」論の提起40周年時（1967.8.7），同軍は江蘇北部から合肥に進駐した。李は忍耐強い説得で連合を実現させ（9.19），翌年行政首長（省革命委員会主任）を兼務した（4.20）。蕪湖市「6.26」武闘の現場に踏み込んだ武勇伝も有り，毛は中央通達（8.4）で経験を広げた。

8期12回全会の開幕式で，周恩来が華東分科会の名簿を読み上げた時に李の名前が出た。途端に毛が「李徳生は誰かね」と質問を挟み，列席者の軍長への異例な興味に人々が訝った。毛は周の指示で起立した李との初対面で，故郷・年齢を訊き安徽・蕪湖問題の善処を褒めた。李が報告した要訣の「大造輿論」（大いに輿論を作る）も，毛は我が意を得た様に肯定した。

李は「9大」で中央委員に初当選し，1中全会で政治局委員候補（4人中3位）と成った。委員陣の内の陳錫聯（1915.1.4～99.6.10，瀋陽軍区司令，上将）は戦争時代の上官で，許世友（06.2.28～85.10.22，南京軍区司令，同）は，同郷（河南新県）と今の上官である。彼は同じ紅4方面軍系の2人に非力・不適格を訴え，中央に再考するよう伝言を頼んだが，無理の相談であった。

委員21人中の軍人は林彪・朱徳・劉伯承・葉剣英元帥，林麾（き）下の「4大金剛」（四天王）

の黄永勝（総参謀長，1910.11.17～83.4.26）・呉法憲・李作鵬（副総参謀長兼海軍第1政委，14.4.24～2009.1.3）・邱会作（14.4.16～02.7.18，同兼総後勤部長，中将，同）と葉群も居り，謝富治（副総理兼公安相･北京市委第1書記兼革委会主任，09.9.26～72.3.26，上将）を含む12人は，半数を超える。

紅軍時代の11人（葉群以外）の内8人が1方面軍系，陳・許・謝が4方面軍出身である。42日後に歿した賀龍の粛清で2方面軍は零（ゼロ）と為り，対照的に林派の人数・権勢が突出した。朱・劉は董必武と同じ骨董的な飾りなので，現役陣の1/3を占める比重が極めて大きい。陳伯達の加勢は「如虎添翼」（鬼に金棒（かな））と言え，故に毛は彼を倒して文武両輪の形成を防いだ。

紅4方面軍の3人は毛に忠誠を尽し，軍職が無い李先念も周に近いながら同様である。委員候補4位の汪東興（李徳生と同じ階級）は毛の側近で，2位の李雪峰も別に林派ではない。1位の紀登奎（河南省革委副主任，1923.3.17～88.4.13）は，毛が「老朋友」として高く買った。毛は李・紀を後継者集団の有力候補と見做し，林派と対抗するよう破格に抜擢・重用した。

毛は全会で周が選挙結果を公表する際，李徳生同志をもう1回見てみたいと言い出した。起立・敬礼した李は周の指図で軍帽を脱いで黒髪を見せ，毛は感慨深く再び年齢を訊ねた。「53歳，53歳！」とその答えを復唱した毛は，22歳差の自身の老いを改めて感じた事か。一介の軍長・省首長を晴れ舞台で2度も特別視した事は，建国後の毛には他に類を見ない。

李・紀は現職を兼ねた儘，国務院業務組（「文革」中の内閣常務会議）成員（副総理格）と成った。毛は翌月（1967.8）初に李を接見し，開口一番「私も李徳生だ」の軽口で親近感を表した。彼は内戦中「離得勝」（延安を離れて転戦し勝利を得る）の意で，同音の変名「李得勝」を使った。書類で馴染んだ李の名前が呼ばれた時，両方との同音（Li Desheng）が琴線に触れた。

李の総政治部主任就任は中央決定（12.10）から，辞令発布（翌年4.30）まで時間が掛った。軍の3総部（参謀･政治･後勤）全権独攬を狙う林一味が，不本意な人選に抵抗した為である。彼等が望んだ李作鵬・邱会作を含む「4大金剛」は，廬山会議後に葉群と共に批判された。毛は林派抑制の一環として12月20日に李徳生を呼び，北京軍区司令の兼務を内示した。

懲役18年，永久除名，復帰・再起

毛は16日に第38軍党委の告発に対して，北京軍区の陳伯達批判会議の開催を指示した。陳が河北の造反派対立の解消に動いた事は，軍（同軍の本部＝保定市）への介入と捉えられた。毛の治下では緊急時委託の周恩来を除いて，軍外政治家の軍との濃厚接触が御法度である。陳を北京軍区・華北の「太上皇」と表現したのは，「皇帝」の聖域を侵された気分からか。

陳の反党問題の伝達に関する中央指示（11.16）で，「批陳（陳批判）整風」運動が始まった。「反党分子陳伯達の罪悪行為」の公表（中央文書，1971.1.26）は，政治的な処刑を意味する。10年後の懲役18年の判決（1.25）は，疾（と）っくに打ちのめされた彼にはもう痛痒を感じない。

毛は曾て小指1本を動かせば君を倒せると劉少奇を脅かしたが，陳の打倒は猶更容易い。

毛は李雪峰・鄭維山（北京軍区司令，中将，1915.8.5～2000.5.9）を，陳の「大将」と捉えた。「司令部へ砲撃」で劉を討った（鄭が51歳と成った日）後，今や華北閥の牙城に砲口を向けた。政治局成員と首都圏防衛長官の2人に対する問責は，林派の権勢削減の為の牽制でもある。彼は陳の「宗派主義」を突破口に，軍内の積年の「山頭主義」（縄張り意識）に切り込んだ。

周恩来主宰の上記会議（12.22～翌年1.24）の結果，北京軍区・河北の指導部が改組された。鄭・李に替って李徳生が司令，謝富治が第1政委（直後の謝歿で第2の紀登奎が昇格）と成った。李に継ぐ革委会主任劉子厚（1909.12.27～2001.12.22）は，「文革」前の省長・第2書記である。劉は華北会議開幕31周年時に死去し，李徳生は新県同郷の鄭の11年後の前日に他界した。

周の要請で反党集団と成らず，李は安徽で隔離審査を受け，鄭は同省で管制労働をした。8年囚われた李は「9大」開幕13周年時（1982.4.1），永遠剥奪と為った党籍が復帰された。劉少奇・陸定一と同じ名誉回復は，「10大」前の「林陳反党集団」処分の非無謬を現した。鄭の名誉回復・蘭州軍区司令就任（1969・72）も，毛時代の冤罪の多さ・重さの証である。

毛は「壁の一角を突き崩す」「石を投げる」「砂を混ぜる」戦法で，本丸の林に迫って行く。「批陳整風」会議の招集指示・方針（12.19）に続いて，軍・地方の自己教育を求めた（1.8）。「2月逆流」鎮圧4周年時（2.19），返し刀で軍委辦事組（事務局）の面従腹背を指弾した。林派「4大金剛」・葉群が主体を成す同機構に，毛は李徳生・汪東興・紀登奎を送り込んだ。

中央主催の「批陳整風」報告会（4.15～29）で，林派5大将は自己反省を余儀無くされた。林は出席・講話を拒絶し，「5.1」祝賀の花火大会で毛と視線・言葉を交さず数分で消えた。毛・チャウシェスク（羅馬尼亜党・政首領）会見（6.3）の陪席でも，暫し中座の奇行に出た。副統帥の矜持と「譲歩＝自滅」の意識からか，最後の2回の対面後に完全な訣別を選んだ。

毛は8月中旬に，9期3中全会を経て「10.1」以降に第4期全人代を開くよう提案した。南方巡視（8.15～9.11）で各地の要人に働き掛け，林派への包囲網を広く撒き徐々に縮めた。林派の不穏な動きへの用心から，杭州→上海（9.10）の翌日に突如帰京の秘密急行を命じた。12日に異例の停車（北京駅の手前の近郊の豊台駅）後，李徳生・紀登奎等4人を呼び付けた。

毛は林との対立を明かした上で，38軍の1個師を首都近辺に移すよう李に単独で指令した。李は翌日0時過ぎから周の派遣で空軍司令部に鎮座し，林脱出の特別機の動向を監視した。周は林派の呉法憲司令を西郊空港に行かせ，空軍と無縁の李に中央代表の特命を与えた。李は危機的な事態に的確に対応し，空軍の危険分子の拘束も含めて平定に寄与した。

毛は8月16・17日に武漢で劉豊（武漢軍区政委，中将）・劉建勳（河南党・政首長）等に，李徳生・紀登奎の様な30～50代の後継者を育てようと語った。9月10日に杭州で南萍（浙江省党・政首長兼第20軍政委，少将）・熊応堂（同軍軍長，同）・陳励耘（空軍第5軍政委，空軍大佐）等に，李・紀・華国鋒を例に同じ旨を話したが，5年後の前日に歿した彼の後を華が継いだ。

10 期 1 回全会選出の政治局委員 21 人・委員候補 4 人は，前期の当初と同数である。委員中 13 人が留任，3 人（姓氏画数順＝紀・李・汪東興）が昇格，委員候補は全て新顔である。華は李・紀と違って直接委員と成ったが，李は新入りの王洪文と同じ副主席に昇任した。李は毛が挙げた後継者群の中で頭 1 つ抜けたが，1 年余りで最高指導部から追い出された。

奇数構成，変則・乱心，大量失墜

毛党首時代の初選出（7 期 1 中全会，1945.6.19）の政治局は，委員 13 人（毛・朱徳・劉少奇・周恩来・任弼時・陳雲・康生・高崗・彭真・董必武・林伯渠・張聞天・彭徳懐）から成り，常務委員・委員候補（倶に前期有り）は設けなかった。後に 2 人減（任死去, 高自殺）は 5 中全会（1955.4.4）の増補（林彪･鄧小平）に由り，多数決の建前上必要な奇数構成は 4 年半振りに維持された。

書記処（同期の最高執行部）の 5 人体制（上位 5 者）も同じ原理で，任急逝の当月に陳雲が書記候補（1945.8.23, 彭真と共に増補）から昇格した。政治局委員の即時増補が無かった事は，5 大書記と非最高指導部の一般委員との「権（力格）差」を思わせる。裏原理として，毛は主席就任時に最終決定権が付与された故, 偶数成員の意見が真っ二つに割れても支障が無い。

「6 大」（1928.6.18～7.11，莫斯科）採択（7.10）の党規約は，最高機関の党大会は通例で年 1 回開催し, 中央全会は最低 3 ヵ月に 1 回招集すると定めたが, 戦争や政争で机上の空論に成った。7 回の全会を経て 17 年弱後に「7 大」が開かれたが，新規約（1945.6.11 採択）所定の両会の通常周期（3 年・半年毎）は，依然として特殊な状況が続く所為で守れなかった。

「8 大」（11 年後, 期間中全会 7 回）採択（1956.9.26）の規約は, 党大会・中央委員会任期 5 年, 党大会･中央全会は年 1 回･最低 2 回開くと明記した。然し任期内は全会こそ 9 回行ったが, 大会は「8 大」第 2 次会議（1958.5.5～23）しか無い。任期満了後も言わば「違章」（『中国共産党章程［規約］』違反）の儘，12 中全会を経て 12 年半振りの次期党大会が開けた。

8 期 1 中全会で誕生した政治局は，委員 17 人（毛・劉少奇・周・朱・陳雲・鄧［以上常委］・林彪・林伯渠・董・陳毅・羅栄桓・李富春・彭真・彭徳懐・賀龍・劉伯承・李先念［＿は新］）の他に，同候補 6 人（烏蘭夫・張聞天［降格］・陸定一・陳伯達・康生［同］・薄一波）も居る。「8 大」2 次会議直後の 5 中全会で，林彪が副主席・常委に昇り，3 委員（柯慶施・李井泉・譚震林）が増補された。

党大会・中委の 2 期分に相当する「8 大」の 10 年後,「文革」初の 11 中全会が行われた。改組後の政治局委員は 21 人（毛・林・周・陶鋳・↗陳伯達［↗は昇格］・鄧小平・↗康・劉少奇・朱・李富春・陳雲［以上常委］・董・陳毅・劉伯承・賀・李先念・李井泉・譚・徐向前・聶栄臻・葉剣英），委員候補 5 人（烏・薄・李雪峰・謝富治・宋任窮）で，副主席の改組が無いものの実際は林 1 人と成った。

従来の 26 人中 3 人が物故し（林伯渠・羅・柯），4 人が失脚し（彭真・陸・彭徳懐・張），6 人が間も無く失脚した（劉少奇・鄧・賀・烏・薄・李井泉）。留任を含む新陣容の内 5 人が任期内に失脚

し（陶・陳毅・譚・徐・宋），6人が無力化され（朱・陳雲・李富春・李先念・聶・葉），2人が飾りに過ぎず（董・劉伯承），実権派は33人中7人（毛・林・周・陳伯達・康・李雪峰・謝）しか居ない。

第8期新設の総書記（鄧）が率いる書記処は，毛が政治局・書記処主席を成す前期より地位が下がった。7人（鄧・彭真・王稼祥・譚震林・譚政・黄克誠・李雪峰）から発足し，5中全会で2増（李富春・李先念），10全会で3増（陸・康・羅瑞卿）2減（黄・譚政），政治局常委拡大会議で2増（陶［常務］・葉），11中全会で3減（彭・羅・陸）2増（謝・劉寧一）と為った。

書記処は政治局の指導下で中央の日常業務を処理し，枢要機構の長・成員は全て大物である。当期の書記16人は上記の5人解任の他，5人（鄧・王・譚震林・陶・劉）が任期中に失脚し，書記候補（当初の劉瀾涛・楊尚昆・胡喬木）も2/3が打倒された。「彭羅陸楊反党集団」は全員が書記処に居り，鄧も彭の後任の陶も要職に正比例する危険性を最初から負っていた。

11中全会の改組で毛は鄧を4位にすると考えたが，寧ろ昇格に成ると江青が指摘した。彼女は陳伯達を鄧の前に置き，更に鄧と太刀打ちできる陶を4位にしようと進言した。中央委員でもない妻の横槍で指導部の序列を独断したとは，専制君主の乱心も甚だしい。彼は陶更迭後「中央文革」で書記処を取って代え，反「2月逆流」で政治局の職能を停止した。

毛の意思に由る7回の「政治局生活会」（1967.2.25～3.18）で，彼の「2.19」訓戒で面罵された陳毅・譚震林・徐向前，「2.16」常委「碰頭会」（打ち合せ）で「文革」への不満を露呈した李富春・李先念・葉剣英・聶栄臻が，江青等に「資産階級復辟」等と猛烈に非難された。政治局は悲劇とも茶番劇とも言える強制終了に遭い，「中央文革碰頭会」に乗っ取られた。

李富春（国家計画委員会主任，1900.5.22～75.1.9）は陳雲（05.6.13～95.4.10）と同じ穏健派で，毛は脅威と成らないから新常委会に入れたが，周派を抑える為か2人を冷遇し続けた。16人の副総理（林彪・陳雲・鄧小平・賀龍・陳毅・柯慶施・烏蘭夫・李富春・李先念・譚震林・聶栄臻・薄一波・陸定一・羅瑞卿・陶鋳・謝富治）も，病死の柯・謝以外「文革」中の無傷を免れなかった。

「2.16」咆哮，「2.20」炸裂，「8.4」啖呵

譚震林は「2.16」会議で陳丕顕（上海市委第1書記，16.3.20～95.8.23）を守る為に張春橋に抗議し，今度は党史上最も残酷な闘争で，貴方たちの目的は古参幹部を全て打倒する事だと咆哮した。自分は入党し革命を行った事も，65歳まで生きて来た事も，毛沢東に随き従う事も，全部す当きではないとまで放言し，3日後に毛の糾弾を顧みず面と向って繰り返した。

斬首刑も投獄も党籍剥奪も恐くないから最後まで闘って行る，と譚は「2.16」に言い放った。翌日に林彪への書簡で，犠牲覚悟の造反を以て彼等の蛮行と執政を阻止すると誓った。林は保身の為に毛に転送し，譚の思想が此処まで堕落したとは想定外だと論評を付けた。毛の書面回答は「已閲」（既読）に止まったが，腸が煮え繰り返る様な憤怒も想像に難くない。

彼は1966年末の会議で学生等の過激化に思い悩み，軍事訓練で紀律を高めようと述べた。江青が突然，「毛主席，大衆の決起を許さないなら，私は貴方に造反します！」と叫んだ。駄駄を捏ねる妻の常套手段に毛は黙ったが，怒髪天を衝く譚が立ち上がって不遜を叱った。厳かな会議で騒ぐ権利は何処に有るか等と吼えた後，「什麼東西」（何様の心算か）と呟いた。

江の嗚咽と満座の不安を見て毛は散会させ，人々が逃げる様に退室する中で江は号泣した。陳伯達だけが残って行き過ぎを好意に宥めたが，逆切れで軍服の襟章を捥ぎ取られた。「役立たず！軽蔑する！」の捨て台詞を食った陳は，後ろ姿へ「雌鴉」と罵声を上げた。彼は既に「中央文革」組長の権限を副組長の江に取られ，後の林派入りも自然な帰着である。

林は翌年1月20日に葉剣英・徐向前・聶栄臻と共に，混乱制止の為の軍委命令を起案した。毛の審査検閲を通った8ヵ条は即日（28）発令され，軍事指揮機関への攻撃が抑えられた。毛の好評を得た林は喜色満面で，「主席，貴方の決裁は誠に万歳，万歳，万々歳です」と語った。「2.21」中央通達も同命令を称え，内の7ヵ条は軍外にも適用すると明示した。

「逆流」鎮定の日，蕭華（総政治部主任，上将，1916.1.21～85.8.12）が造反派に家宅捜査された。翌日（2.20）軍委碰頭会で葉・徐が江に抗議し，林は江を呼んで痛罵し辞任で脅かした。葉群が泣きながら必死に喧嘩を調停し，毛の裁定を願う夫に土下座して面会を断念させた。江が不当介入を謝って収まったが，両者不仲の発端は元帥・古参陣の江嫌いを顕にした。

中央・国務院の『無産階級文化大革命の公安工作の強化に関する若干の規定』（1967.1.13）で，毛・林に対する悪意の攻撃は現行の反革命行為と為り，法に依り懲罰す当きだとされた。「公安6ヵ条」の運用は「中央文革」批判まで取り締り，数え切れない冤罪を作り出した。毛の「司令部砲撃」と違う「無産階級司令部」への反抗は，死刑に処される事も多かった。

毛が今まで受けた最大の挑発は，「延安でお前は俺のお袋を40日間姦った（俺を行っ付けた意）。今度は俺がお前のお袋を20日間姦っても可かろう」，という廬山会議での彭徳懐の罵言である。整風被害の怨念爆発に彼は血相を変えて「何!?」と凄み，決裂が不可逆と成った。江の夫君への造反に一喝した譚は翌々月，悲憤に駆られて反逆の暴言を江・毛に吐いた。

入党も革命への参加も毛への服従も否めた極論は，「反党/革命/領袖」の大罪である。一般人なら逮捕・投獄乃至撲殺・銃殺されても仕方が無く，高官でも迫害死に至りかねなかった。毛は只，君は脱党して可い，革命を行らなくて可い，私に随かなくて可い，と応酬した。「悪毒攻撃」に毒舌で行り返すのは「歯には歯」と言えるが，謹慎以上の処罰は無かった。

譚に対する寛容は早年の戦友の絆と共に，気性の激しい直情径行も実害が無い為である。彼が「当代の武則天（女帝）」と断じた江は報復として，譚を裏切り者と公言した（翌年3.21）。譚は8期10全会で欠席裁判を受け，「9大」（67歳の誕生日に閉幕）にも参加できなかった。毛が全会で叩いた「2月逆流」の陳毅・徐向前は中央委員に当選し，譚は重い代償を払った。

毛は『炮打司令部』執筆の前日（1966.8.4），政治局常委拡大会議で劉少奇の過誤を咎めた。

資産階級の立場から無産階級革命に反対したと言われて，劉は「無非是下台。不怕下台，有五条不怕」（最悪でも退陣するだけの事だ。退陣は怖くない。5ヵ条の「恐れず」が有る）と開き直った。196日後の譚の処刑・投獄・除名を恐れぬ闘争宣言は，劉の啖呵の木霊（こだま）の様に聞える。

「無非」（只（ただ）～だけの事だ）と「下台」（退陣する。公職を退く）は，非が無い者の失職を連想させる。譚は林への決意表明の手紙で，彼等の興味は古参幹部を打倒する事で，些細な過失が有れば，執拗に抓（つま）んで放さず，「非打死你不可」（是非とも当人を撲殺しなければ為らない）と書いた。高（たか）が失職と高を括った劉は，「非死不可」（是が非とも死なないと駄目）を想定しなかった。

「五不怕」，「6.13」交代，「6.20」禍根

1957年6月13日，毛は呉冷西（新華通訊社［国営通信社］社長，1919.12.14～2002.6.16）を接見し，新任の兼務（『人民日報』編集長）では最悪の事態に対する「思想準備」（覚悟）が要り，「五不怕」（一に解任を怖れず，二に党籍剥奪を怖れず，三に女房の離婚を怖れず，四に投獄を怖れず，五に処刑を怖れない）の「精神準備」（心構え）を持てば，実事求是も真理の堅持も出来ると激励した。

『人民日報』は晋冀魯（山東）豫（河南）中央局の機関紙から発足し（1946.5.15創刊），名付け親（原案の『晋冀魯豫日報』『太行報』を否定）も紙名題字（7.1）も毛である。所属・創刊地（河北邯鄲市）に因んで後に「晋冀魯豫『人民日報』」「『人民日報』邯鄲版」と称される祖形は，晋察冀辺区の『晋察冀日報』と合併して華北局の機関紙に成った（1948.6.15，河北平山）。

同紙（通称「華北『人民日報』」「『人民日報』華北/平山版」）は，中央機関紙に昇格した（1949.8.1）。新社長の胡喬木（新華社社長兼任，1912.6.1～92.9.28）は，陳伯達と並ぶ毛の政治秘書（41～66）で，「文革」前に新聞総署署長（内閣報道局長）・中宣部副部長・書記処書記候補を歴任した。編集長の鄧拓（元『晋察冀日報』社長兼編集長，北京市委宣伝部長）は，間も無く社長を兼ねた。

初代社長張磐石（1905～2000.6.22）は後に中宣部副部長・林業部次官を務め，同紙所属の中央華北局（1948.5.9～54.4.27）で宣伝部長・副書記・第4書記を歴任した。華北局の第1書記（劉少奇→薄一波），同第2（薄→聶栄臻→王従吾［後に中央高級党校長等，1910～2001.9.13］），第3（聶→劉瀾涛→劉秀峰［同建築工程相等，09.11～71.3.29］）は，華北閥で固まった観が無くもない。

解消後再設置の同局（1961.1.18中央全会批准～「文革」初消滅）の第1～3書記は，李雪峰（兼北京軍区第1政委）・烏蘭夫（内蒙古第1書記）・林鉄（河北第1書記）である。烏蘭夫（蒙古（モンゴル）族，漢名雲沢，1906.12.23～88.12.8）は李より10年早く政治局委員候補と成り，第1～3期副総理・上将（51位）でもあるが，両大物は彼（1966.8解任・軟禁）・李（上記処分）の順で失脚した。

歴代書記の内に劉秀峰が一番早く倒され，「四清」（政治・経済・組織・思想を清める）を合言葉とする社会主義教育運動で批判され，11年間務め北京10大建築の建設を推進した建工相を免職され（毛の『炮打司令部』執筆1年前の1965.8.5），鄭州（河南省都）の工場に左遷された。

15 年後に名誉回復・処分取消と成ったが，「文革」の迫害で夭逝した彼にはもう届かない。

終盤の最下位の張磐石は小物で余り被害が無かったが，後任の『人民日報』社長鄧拓は中央紙を司る故 8 年足らずで編集長を更迭された。1956 年「6.20」社説（陸定一添削，劉少奇承認）で反冒進を強調した事は，毛の不満を招き南寧会議でも蒸し返された。信頼喪失を悟った彼は社長を辞任し，北京市委書記処書記に転出した（1958.9.12，同日より呉が社長兼務）。

毛の演説『人民内部の矛盾を正しく処理する問題に就いて』（最高国務会議にて，1957.2.27）も，前日に 45 歳と成った鄧拓は上層部の指示が無い為に宣伝せず毛に「死人」と酷評された。4 月 1 日，鄧小平等が社に来て毛の批判を伝達し，同紙に対する中央の指導強化を告げた。同紙の論調が左旋回し始めた 10 日，毛は鄧拓と編集陣を寝室に呼んで辛辣に非難した。

編集長交代（6.10）に先立って，「6.8」社説で「反右」の進軍喇叭（らっぱ）の第 1 声が吹かれた。翌年の同日から業績の虚偽申告の提灯記事が続発し，荒唐無稽な畝（ムー）当り生産高の捏造の競争を煽った。毛等の首肯や譚震林（農業担当の書記処書記）の推奨で，「人有多大胆，地有多大産」（人に大きな胆力が有れば，その分だけ土地の生産高も大きく成る）と言う熱狂が湧き捲った。

毛が「反右」を決意し論説を書き始めた日は，晋冀魯豫『人民日報』創刊 11 周年に当る。中央紙の初代社長胡喬木が 54 歳と成った日，「妖怪変化一掃」を謳う「66.6.1」社説が出た。呉冷西歿の 46 年前（1956.6.16）に李先念の反冒進談話の掲載は，鄧拓の転落の起点に近い。建軍 22 周年記念日の『人民日報』昇格と共に，同紙の歴史・転換点には様々な天数が有る。

鄧・呉晗・廖沫沙（北京市委統戦部長，1907.1.16～90.12.27）共著随想『三家村札記』（市委機関誌『前線』連載，61.10～64.7）は，「文革」前夜に関鋒・姚文元・戚本禹の論説（66.5.8『光明日報』，10 日『解放日報』『文滙報』，11 日『紅旗』）で攻撃された。「反党集団」の冤罪で鄧は自殺し，呉は獄死し，廖は同じ秦城監獄に 8 年も囚われた後 3 年間の強制労働に処された。

「文革」初日（5.16）『人民日報』転載の戚の前出批判文は，鄧を「叛徒」と断じた。妻丁一嵐（1921～98.9.16）は開国大典を中継した放送員（アナウンサー），中央人民広播電台（国家放送局）編集部主任で，夫妻とも党の「喉舌」（宣伝機関，代弁者）であるが，裏切り者は絶望的な罪名だから家族に距離を置かれ，翌日の深夜に彭真等・妻への遺書を殴り書きで綴り睡眠薬で永眠した。

「囚号 6808」，「零零零零零壱号」烈士，「龍潭 3 傑」の 1935

康生は秦城監獄の新入り最多年の 3 箇（が）日中（1968.1.3），反革命分子の劉仁・徐子栄・馮基平・崔月犂は党・国家の核心的機密を売り，罪万死に値する，彼等に手錠を掛けて厳しい突撃的尋問を行い，武装解除・降伏させる当きだ，と特捜班（「専案小組」）の報告書に処置案を出した。毛・周の許可に由り 2 人の首都党・政高官，2 人の同監獄建設推進者が投獄された。

劉（市委第 2 書記・華北局書記処書記，土家族，1909～73.10.26）は虐待死を遂げ（囚人番号「6808」），

崔（彭真の元政治秘書，副市長，20.1～98.1.22）は7年余り中4年超も手錠を外されなかった。林彪事変後の短期出所治療→再収監で発狂した崔は，巡り巡って1982年に衛生相と成った。馮・范（副市長・市委機関紙『北京日報』社長，1919.9.7～2009.1.4）も，精神に異常を来した。

馮（1.9投獄）は両手を交叉して背後に回した苛酷な体勢で，5年間も手錠が掛り続けた。公安局長時代の設計で自殺できない牢屋の造りは，自身が狂人と化す活き地獄に成った。市委宣伝部長の李琪（1914.10.30～66.7.10）は，先輩の鄧拓と同時期に批判を受けて自殺した。30年代以来の中共の粛清で屡々現れた迫害と自害の連鎖は,「文革」で空前の規模に達した。

被害と加害の連鎖も顕著に見られ，林彪と江青の決裂の端緒と成った蕭華が1例である。彼の最年少（授与時39歳）上将は軍委副秘書長に昇任（1959.10）後，会議で彭徳懐を弁護した鐘偉（北京軍区参謀長，少将，1915～84.6.24）に手錠を掛けさせた。鐘は安徽省農業庁副庁長に左遷され「文革」の迫害も受けたが，蕭も1967年7月に失脚し獄中で7年を過した。

譚震林は「2月逆流」で「砍脳袋」（斬首）も覚悟で闘うと豪語したが，長征出発の初期に彼は「国家」政治保衛局分局長として項英（江西分局書記）と共謀し，謂れ無き嫌疑（地主の父母が農民暴動で殺された為に党を恨う云々）で，林野（紅12軍参謀長，1902年生）と新妻（魏蘇月，生年未詳）の秘密裡斬首を命じた（「7大」で名誉回復，革命烈士に追認。譚は終生後悔したと言う）。

「文革」開始の丸25年前（1941.5.16）に延安で創刊した『解放日報』は整風運動の暁に，批判を拒まないと言う毛沢東の宣言に応えて，等級制度や言論規制を論う雑文を掲載した。諷刺の山葵が効いた『野百合花』（1942.3.13・23）の作者王実味（文筆家，06.4.5～47.7.1）は，特別研究員を務めた中央研究院で批判され,「反党5人集団」の罪で10月に党籍を失った。

彼は康生（中央社会部部長）の命で逮捕され（1943.4.1),「トロツキー派の回し者」と自供した。「救済運動」の再審査で名誉回復が無く，延安撤退（1947.3.19）後も移動拘留所に囚われた。移送先の公安局が「反動的言行」と転戦の負担を理由に中社部に処刑の了承を請い，李克農副部長の同意に由り山西興県で秘密裡に斬殺し，死体を枯れた井戸に投げ込んだ。

建党26周年記念日の異端文人の抹殺は，前年の「4.8空難」と同県で起った。14年前の「5.1」の段徳昌師団長処刑も，銃弾節約の為の当人の申し出で斬殺と為った。段は毛署名の共和国「中央字（番号）零零零零壱号」烈士証書（1952.8.3）の名誉を得たが，発行の丸40年後に歿した王洪文の栄→辱にも及ばず，王実味は歿43年後に漸く名誉回復できた（91.2.7）。

李（1899.9.15～1962.2.9）は中央特別行動科（27.11～35.8，上海）情報科の主力で，銭壮飛（1895～1935.3.29?）・胡底（1905～35.9）と並んで，周恩来（特科初代総責任者）に「龍潭（“虎穴”の類義対語）3傑」と称賛された。敵地に潜伏し電報暗号・機密情報を盗み取った等の3功臣の内，銭は長征中に行方不明の犠牲と為り，胡は紅4方面軍との内争で秘密裡に絞殺された。

外交部次官・副総参謀長・中央調査部長を歴任した李は唯一作戦経験の無い上将（4位）で，同じ「第2の戦場」の朝鮮戦争停戦談判で中国の首席代表として国益に貢献した。志願軍

入朝参戦 7 周年記念日（1957.10.25）に脳溢血で倒れ，以降脳軟化・病歿へと向った。丸 60 年後の習近平党首再選で「2035 暗号」が提起されたが，此処でも 1935 年が注目に値する。

毛沢東は王実味殺害に怒って「王を返せ」と詰り，李の後の健壮な 10 年に陰影を落した。一枚噛んだ賀龍も 20 年後に受難の番と為り，江青の毛への造反は賀打倒を望む為であった。毛は賀と最後の対面（1966.12.28 の会議）で優しく前列を勧めたが，粛清の腹が決っていた。丸 2 年前に毛が劉を叩いた事で賀は劉に毛への尊重を促したが，忠誠は報われなかった。

毛･劉永訣の 6 日後（1967.1.19），周恩来は中央を代表して賀と面談し最後の面会と為った。林彪の諸々の不満を伝え，昔の反革命粛清の拡大化の責任を指摘し，自省を求めた上で，主席も私も貴方を守る意向で，私が探した処に少し休んで，秋に私が連れ戻す，と言った。党の不信を悔やむ賀は翌朝 4 時，薛明（1916.5.12～2011.8.31）と共に帰れぬ行先（ゆきさき）へ発（た）った。

同行の楊徳中（中央警衛団政委，大佐［最終階級＝上将］，1923.12.1～2020.11.12）が，玉泉山（軍委別荘地）に着いた後，「紅旗」（要人用特製乗用車）から「BJ212」（国産軍用 4 輪駆動車）への乗り換えを要請した。寒さを凌ぐ空調も無い中古「吉普（jípǔ）」（ジープ）を見た瞬間，夫妻は不吉な予感に襲われて真っ青に為り，賀は「儂（わし）を迫害して死なせたい人が居る」と喝破した。

元帥 2・4 位 / 大将 1・3 位の相剋，上将 1・2 位の共倒れ

賀は建国前の南昌蜂起総指揮・紅 2 方面軍総指揮・8 路軍 120 師師長・西北軍区司令を経て，西南局第 3 書記（鄧小平・劉伯承に次ぐ）兼西南軍区司令から国家体育委員会主任に転じ（1952），2・3 年後の副総理就任・元帥授与（10 人中 6・5 位）も含めて閑職に置かれた。軍委副主席・国防工業委員会主任への栄転（1959）は，彭徳懐に次ぐ元帥失脚の起点と為った。

元帥失脚第 1 号の劉伯承（4 位）は，紅軍総参謀長・8 路軍 129 師師長・第 2 野戦軍司令を経て，南京市軍事管制委員会主任（1949.5～50.7）・西南軍政 / 行政委員会主席（50.6～53.3 / ～54.9）・南京軍事学院（50.10.30 創設）初代院長兼政委・訓練総監部（8 大部中 2 位）初代部長（55.4～57.11）を務め，高等軍事学院（57.8.23 創設）初代院長兼政委の在任中に突如失脚した。

「軍事教条主義」を批判する軍委拡大会議（1958.5.27～7.22）で，担架で担がれて出席した彼は自己批判を強いられ（7.10），軍事学院に対する指導権を奪われた（9.13，正式解任は 11.17）。政治局委員（内元帥 7 人）でありながら，建国 10 周年の直前に軍委戦略小組組長に降格した。南京軍事学院始業の丸 15 年後（1966.1.8）に軍委副主席と成ったが，実権は伴わなかった。

最初に攻撃された粟裕は，彭徳懐･聶栄臻（元総参謀長代理）との仕事上の摩擦が災いした。上位者に逆らい国防部の権限を欲する個人主義，ソ軍と密かに通じる反則等が非難された。彭主宰の苛烈な査問の末，妻（楚青，1923.2.10～2016.2.21）代筆の謝罪文を読み上げた（7.14）。不本意に罪状を殆ど認めた結果，総長解任（8.31 政治局決定）で大将 1 位の栄光が傷付いた。

上将 1・2・24 位の蕭克（訓練総監部長・国防部次官，1907.7.14～2008.10.24）・李達（同副部長・次官，05.4.19～93.7.12）・郭天民（副部長，02.3.30～70.5.26）も，会議の糾弾と後の査問を経て「反党宗派・野心家・軍閥」等の断罪で解任され，農墾部次官・国家体委副主任・総参謀部軍校部長に左遷され，総参謀部に次ぎ他の 6 部の上に在る訓練総監部も撤廃された（12.11）。

軍委拡大会議の開幕は林彪の党副主席昇任の 2 日後に当り，8 年後の翌日に「中央文革」が成立し，劉帥の自己批判の丸 8 年後に李琪が自殺し，職務停止の 13 年後の同日に林が変死した。粟大将謝罪の日に 51 歳と成った蕭上将も敗れたが，勝者の彭帥は丸 1 年後に毛沢東への意見書を書き，閉幕の翌年の翌日に毛が政治局拡大会議で彭批判の「砲撃」を始めた。

彭は解任後に中南海から近郊の掛甲屯呉家花園に移され，「解甲帰田」（鎧（よろい）を脱ぎ帰郷して田を耕す）の様に自給自足の農耕に従事した。隠居に甘んじない気性から，大飢饉中（1961.10.30～12.26［毛の 68 歳の誕生日］）に毛と同じ故里（ふるさと）の湖南湘潭県で農村調査を行って中央に報告し，自らの歴史上の問題を釈明する上申書を政治局に出す（62.6.16）等，不穏の動きも見せた。

副総理再任 5 ヵ月後に国防相と違って名目だけ残り，1965 年新内閣で留任が無くなった。毛との 6 年振りの面会（同年 9.23）が永訣と為り，彼は毛の意志で黄克誠・習仲勳と共に首都に追い出され，西南局「3 線」（内陸地域戦備工程）建設委員会第 3 副主任として成都に赴いた（11.30）。翌年 12 月 27 日に北京の紅衛兵に強制送還され，衛戍区「監護」下に置かれた。

彼は 1967 年元旦に毛宛（あて）の手紙で拘束の経緯を報告し，暗に危険な状況を伝え救助を望んだ。毛と林彪・江青は回覧で既読を表す○を付け，周恩来も会議で読み上げただけである。結びの「向您最後一次敬礼！」（貴方に最後の敬礼をします！）は，毛への上申も出来なくなる事の覚悟で，「祝您万寿無疆！」（貴方の長寿無限を祈ります！）は，当時の自殺者の遺書に多い。

彭は「9.13 事変」を知らされた時（翌年 8 月 23 日），激しく動揺し特捜班に不服を訴えた。その様に林彪を殺した事には異議が有り，彼の死には同意できない，と周への伝言を頼んだ。仲の悪い林を「革命的」と弁護したのは，「兎死狐悲」（兎死すれば狐これを悲しむ）の心理か。長年の囚人扱いと廃人同然の病弱で，殺意を察知し夭折を予感せずにいられなかったろう。

衛戍区の彭・黄克誠・譚政批判大会（1967.9.1）で，李鐘奇副司令（少将）が彭に平手を打った。彼は訓練総監部組織計画部副部長在任中に，蕭克失脚の影響で軍副参謀長に左遷された。迫害・排斥への私憤を晴らす暴力は事後に呉忠司令（同，1921～90.2.26）に叱られたが，彭の名誉回復後も咎めが無く，長寿（1913～2003.1.11）と官製訃報の全面的な肯定を得た。

元帥 2 位の彭は 4 位の劉を倒した後に倒され，自ら追放した上将 1 位の蕭は軍事政治大学校長・国防部次官に復帰し（1972・80），彼の生誕 110 周年の日に 101 歳で大往生した。大将 1 位の粟は軍委常委・国務院業務組成員（1967）・軍事科学院第 1 政委（72）に就任し，粟批判に加担した 3 位の黄は総参謀長を継いだ翌年，「反党集団」で躓き 77 年に復活した。

蕭は軍委拡大会議で張宗遜（副総長兼訓練総監部軍事学校・軍校部部長，1908.2.7～98.9.14）に異

を唱え，張に近い彭を怒らせた。上将 3・7 位の張・鄧華（同兼瀋陽軍区司令，1910.4.28～80.7.3）は彭と共に倒れた後，張は済南軍区副司令・総後勤部長に起用され（71・73），鄧は四川副省長へ左遷（60）後 68 年に省革委生産指揮組副組長と成り，元帥陣の迫害死より益しである。

多重系列，「55・88 年組」，「将門父子」

中共軍内の巨大（マンモス）「山頭（なわばり）」は，古く紅 1 方面軍（1930.8.23～37.8.24，紅 1 軍団［30.6.19 創設，初代総指揮・政委＝朱徳・毛沢東］・紅 3 軍団［同 6 月中旬，彭徳懐・滕代遠〈04.11.2～74.12.1〉］合成）・同 2（36.7.5～37.8，賀龍・任弼時）・4（31.11.7～同，徐向前・陳昌浩）が有った。歴史・実力とも 1・4・2 の順と為り，長征は中央紅軍到着の翌年の 3 大主力合流（1936.10.22）が終結に当る。

抗日戦争中の 8 路軍（国民革命軍第 8 路軍，1937.8.22 編成，9.12 に第 18 集団軍に改称，総司令・副総司令＝朱徳・彭徳懐）は，115・120・129 師（母体＝1・2・4 方面軍＋陝北紅軍，師長＝林彪・賀龍・劉伯承）を擁し，5 首長は賀だけが非中央系である。新 4 軍（同新編第 4 軍，1937.10.12～47.1.23，軍長＝葉挺→陳毅）も，陳は紅 1 軍団紅 3 軍の初代政委で紅 1 方面軍系に属する。

内戦時代の解放軍 5 大主力でも，第 1（西北）野戦軍（1947.7～50.4）の彭徳懐司令兼政委，第 2（中原，48.5～50.5）の劉伯承司令・鄧小平政委，第 3（華東，47.3～50.8）の陳毅司令兼政委，第 4（東北，48.1～55.4）の林彪司令・羅栄桓政委，華北（軍区第 1～3）野戦兵団（48.5～49.4）の聶栄臻司令・薄一波政委は，薄を除いて全て中央紅軍組である。

彭・陳の軍事・政治首長兼任では，相互協力・牽制の両職の摩擦が起きないが，劉・鄧の関係良好と違って，狷介な林は常識的な羅を建国後も鬱陶（うっとう）しがった。他方，陳は同じ新 4 軍系の粟裕（3 野副司令→司令・政委代理）に指揮を頼る半面，油と水（気質の陽・剛・熱 vs. 陰・柔・冷）の相性の悪さも有って，1958 年に彭・聶と共に 3 元帥が大将 1 位を下ろす行動に出た。

粟は解放戦争の功績が林に次ぎ，実力本位なら順当に元帥と成る筈であった。暗黙の新 4 軍系枠 1 名を巡って，周恩来が劉少奇（皖南事変後の政委）の粟推しを押し切って，軍を離れた李先念等と同じ対象外の陳を押し上げた。陳は周の盟友（1958.2.11 より後任外相）・毛沢東の詩友として有利で，粟は謙抑で陳の華野司令も彼が内示を固辞し譲った（48.5）のである。

1958 年の粟批判に対する是正は，聶の存命（～江青自殺の 1 年後の 92.5.14）等で困難を極めた。歿 7 年 7 ヵ月後の軍委常務会議（1987.9.11）で，前日に 80 歳と成った宋時輪（3 野第 9 兵団司令・軍事科学院院長等歴任，上将 37 位，91.9.17 歿）の発案に由り，『中国大百科全書・軍事分巻』の「粟裕」項目に，58 年に所謂反教条主義で誤った批判を受けたと記す事が決った。

更に 7 年余り後（1994.12.25），軍委副主席の劉華清（前海軍司令）・張震（前国防大学校長兼政委）は『粟裕同志を追憶する』で，故人が 58 年に受けた批判及び其（それ）に由る長年の不公平な処遇は歴史の過誤だと断言し，この見解は軍委の意見でもあると強調した。劉は政治局常

委（14 期 1 中全会選出，1992.9.19）だから権威が有るが，名誉回復の中央・軍委通達は遂に無い。

同期常委 7 人中 6 位の劉は最年長（1916.10.1 生），末席の胡錦涛は最年少である。軍委主席（江沢民）承認の両副主席連名追悼文の発表は，胡（次代主席）の 52 歳の誕生日に当る。胡時代の副主席の郭伯雄（元蘭州軍区司令・前常務副総長，1942.7 生）・徐才厚（前総政主任，同 43.6）に由る再評価なら，両者の後の失脚で箔が落ちかねないので，粟には不運中の幸運と言える。

建国後の「軍銜」（軍人の階級）制度は総幹部部（8 部中 5 位，部長＝羅栄桓）が推進し，全人代常委会採択の法令（『中国人民解放軍軍官服役条例』，1955.2.8）で整備され，元帥・大将授与（9.27）から発足した。劉伯承の軍隊正規化志向を嫌う毛は，等級格差解消の「烏托邦」（空想的理想郷）構築の一環として，1965 年の「革命化」熱潮で取消を強行した（同 5.22 決定，6.1 実施）。

1 年後の「彭羅陸楊」解任（5.23）・「妖怪変化一掃」号令（『人民日報』6.1 社説）以降，毛の軍事独裁と無何有郷実験は 10 年超も続いた。「官兵平等」の襟章画一の弊害は中越戦争で現れ，複数部隊合同や上官戦死の場合に序列の不明で指揮系統の混乱が犠牲を増幅させた。到頭 9 年余り後に法令化で復活し（同前，1988.7.1），授与が再開された（9.14，上将 17 名）。

「88 年組」上将は 55 年授与の上・中・少将各 1・2・9 人と佐官 5 人から成り，内の劉華清（初代海軍少将）・張震（同中将）が相継いで軍委副主席に昇った（1990.4，93.3）。唯一健在の万海峰（成都軍委政委，初代大佐，1920.9.15 生）に次ぐ長寿の張震（14.10.5～2015.9.3）は，存命中に 3 男（第 3 子）海陽（第 2 炮兵政委，49.7.16 生）の同じ新制最高階級への昇進を見た。

次の 1993・94・96・98 年の 6・19・4・10 人と 2000 年の 16 人の間の 99 年の 2 人が，制服組の最高地位（軍委副主席・政治局委員）に昇り詰めた郭・徐（88 年少将・大佐）である。選り選りの 57・58 人目は 1957・58 年の狂乱と重なる縁起の悪さを思わせる様に失脚し，「売国賊」林彪への処罰にも無かった軍籍・階級剥奪まで，党からの除名と共に行われた。

改革・開放期初授与の丸 10 年後に享年 90 で逝去した開国上将張宗遜は，3 子中の次男又侠（瀋陽軍区司令，後に総装備部長，1950.7 生）ともう 1 対の父子上将と成る。「1 大」開幕 90 周年時（2011.7.23）に授与された「将門之子」は，習党首続投の初日（志願軍朝鮮参戦 67 周年記念日）に政治局委員・軍委副主席に当選し，両者の高位と出藍の誉れは張震父子に勝る。

「紅 2 代」，軍商結合・閨閥，奇縁・恩讐

張宗遜の長女（氏名・生年未詳）は，顔金生（新疆軍区副政委等，初代少将，1918.4～94.3.28）の独り（？）息子暁寧（南昌陸軍学院政委等，2001 年少将，51.11 生）に嫁いだ。張震の独り娘（第 5 子）燕陽（1952.8.25 生）の夫寿暁松（51.10 生）も少将（授与年未詳）で，軍事科学院戦争理論と戦略研究部在勤（後に部長）中，単著『粟裕軍事指導芸術』（97）等の業績を積み上げた。

張震の長男小陽（解放軍外国語学院院長，1941.10 生），次男連陽（総参謀部軍事代表局局長，

44.11 生），4 男寧陽（総装備部綜合計画部部長，50.10.5～2015.7.3）は，倶に少将（寧陽は 05 年授与）である。4 児も全員将軍の名門中 3 男の父に遜色の無い昇進が際立つが，開国元帥・大将の子女に多い将軍も中将止りで，新最高階級者は旧第 3 階層以下の将領の系譜から出た。

張震の娘婿が論考した粟は，彼が 3 野（最終職務＝参謀長）で補佐した司令・政委代理である。粟の長男戎（じゅう）生（第 24 集団軍司令･北京軍区副司令，1999 年中将，42 年生）は，李夫克（解放軍政治学院副院長，初代少将，15～88）の娘婿（69 年に結婚した妻李曼俊［42.9 生］は，後に電子工業部第 6 研究所所長兼党委書記を経て，北京華勝計算機有限公司（コンス）董事長［取締役会長］）である。

次男寒生（1947.11～2018.9.6）は海軍勤務（68～75）から遠洋航海業界に転職し，3 子中の娘恵寧（第 2 炮兵研究院主任，大佐，49 年生）は 75 年に陳毅の 3 男（第 3 子）と結婚した。夫陳小魯（1946.7.30～2018.2.28）は同じ大佐まで進んだ（総参謀部第 2［情報］部勤務・党中央政治体制改革研究室社会改革局局長等）後，92 年から後の張連陽と同じく実業界に転身し経営者と成った。

陳毅の次男丹淮（1943.9 生）も軍人（総装備部科技委専職委員，少将）であるが，長男昊（こう）蘇（42.5 生）は軍に在籍（軍科院等勤務）後，80 年代に政界入りし（共産主義青年団中央書記処書記・北京副市長・広播電影電視［放送・映画・テレビ］部次官），娘珊珊（50 年生）は通用名「叢軍（CóngJūn）」（簡体字＝「丛」）と同音･形似の「従（同＝从）軍」と裏腹に，外交官（駐エストニア大使等）に従事した。

陳毅は臨終の直前に葉剣英が伝えた毛沢東の「2 月逆流」再評価に応答できず，翌月の米大統領訪中と 8 ヵ月後の中日「恢復邦交」（日本側の名称＝国交正常化）も見られなかった。73 日前の国連での中国代表権獲得は失権外相の彼にせめての慰めと成り，娘は周恩来が人材不足を補う為に作った外交部出国集訓班に入り，選抜で英国公費留学に行った（1972～75）。

集中特訓・洋行仲間の彼女と結婚した王光亜（1950.3.3 生）は，大出世を果した（常駐国連代表・特命全権大使→外交部常務次官→国務院香港澳門（ホンコンマカオ）事務辦公室主任→中央委員）。同期の楊潔篪（けつち）（1950.5.1 生）は高校（上海外国語学院附属中学）寮の「室友（ルーム･メート）」の王よりも，一段以上に進んだ（駐米大使→外相→国務委員［副総理格］→中央外事工作領導小組［後に委員会］辦公室主任→政治局委員）。

楊も同行の才媛（楽愛妹，生年未詳，後に外交部国外工作局参事官等）を娶ったが，同期 5 傑は周文重（1945.8 生，外務次官･［楊の後任］駐米大使）･沙康祖（47.9.24 生，国連副事務総長）の他，図永龍（43.5 生，対外経済貿易部次官，世界貿易機関（WTO）中国加盟交渉首席代表）も居る。図の誕生日の「5.1」説（公式発表無し）が事実なら，楊の丸 7 年前に当り奇縁と成る。

子供無しの彭徳懐を除く元帥の内，朱徳の 1 児 1 女は民間人，林彪の 1 児 2 女は軍人（無階級時代），劉伯承の 4 児 4 女中 3 児 1 女が少将，賀龍の 1 児と 4 女中 1 女が中・少将，羅栄桓の 2 児 5 女中 1 児が中将，徐向前の 1 児 3 女中 1 児が中将，聶栄臻の独り子（娘）が中将，葉剣英の 3 児 3 女中 1 児が少将で，陳毅の 1 児と合せて中将 4 人・少将 8 人である。

中将の聶力（国防科学技術委員会科技委副主任，1930.9 生）･賀鵬飛（海軍副司令，44.9～2001.3.28）･羅東進（第 2 炮兵副政委，39 年生）･徐小岩（総参謀部信息化部部長，47 年生）の内に，年齢・

授与（94・94［海軍］・99・2006）順第1の聶は女性の世界初と成り，夫丁衡高（国防科工委主任・中央委員, 31.2.3生）は元帥子女の配偶者中唯一の上将（88年授与の中将より94年昇進）である。

国防科工委（1998.3.10～2008.3.15）の前身（解放軍科学技術委員会，初代主任＝聶栄臻）は，創設（1958.10.16）6周年時の原爆初実験成功等で貢献が大きい。中央官庁時代の2代目主任が元国防工業総帥の娘婿である事は，聶に付き纏った華北「山頭（なわばり）」の猜疑と別の閨閥の印象を招く。陳毅元外相の娘婿の外交部常務次官就任も，縦令（たとい）人物本位でも俗世の臆測が持たれ易い。

陳・粟の児・女の結婚は親の恩讐を超える融和と言え，末に軍人と実業家の結合を成した。「紅2代」（開国世代の高官の子弟）で結ぶ閨閥は，「山頭（なわばり）」や軍の優位を稀薄化する事も有る。陳の4子の軍・民・官・商は元帥政治家・外相に似合い，大将1位との縁戚も天意である。粟との対立は不倶戴天の程でなく，「炮撃」も毛の異端排除に乗せられた腹癒せに過ぎない。

「姻戚≠閨閥」の例として賀龍と蕭克が有り，賀は長征時代の紅2・6軍団（軍団長＝賀・蕭）合流（貴州省木黄地区, 1934.10.24）後，妻（3番目）蹇先任（けん）（09.4.5～2004.7.25）の妹先佛（16年生）を蕭に紹介し結婚（35年初）に至らせたが，便水（湖南芷（し）江県）合同作戦（36.1.5）失敗の際に6軍団が2軍団に連絡せず撤退した事を生涯許さず，自身の婚姻も解消した（29.9～42）。

賀・蕭の「連襟」（姉妹の婿同士）は，「姉妹花」の片方の離婚に由り相婿（あい）ではなくなった。蕭は賀の長女捷（しょう）生（1935.11.1生，軍科院軍事百科研究部部長，少将）の名付け親（戦捷［長征勝利］の直後に生れた意）なのに，2ヵ月後の不可抗力の無断撤退で賀に「不誠実」と見られた。1958年に元帥陣も加わる攻撃で失脚した事は，果して賀の蟠（わだかま）りと無関係であったろうか。

附記

引用・参考文献は連載の途中か終了時，又は単行本化の際に，纏めて記す予定である。

（夏　剛，立命館大学国際関係学部教授）

2021：变 ——百周年的再起动 “红羊劫”的前奏曲？（1）

2021 年适逢中共建党 100 周年，又是习近平所称百年未有之大变局，国内外诸多变化值得深思。

本文继笔者 9 年来发表的《诡异暗合：历史人物生卒、历史事件发生日时中含天命 · 天意、天理 · 天道的天数 · 天机——中共双重诞辰、中国多轮演进变幻所隐现的“时环天数 · 劫结天机”论考之一》，《劫结难逃：“时环史缘”的变数 · 定数交织和“人环情缘”的荣辱 · 盛衰转换——中共双重诞辰、中国多轮演进变幻所隐现的“时环天数 · 劫结天机”论考之二》（2013），《“新兴国 · 老大国”的蹉跌与考验—— 2011.7.23（中共“90 诞辰”）高速铁路撞车、脱轨事故的冲击和启示》（2015），《毛泽东的束缚和习近平的“超限战”——古今“盛衰兴亡周期律”及中国之走向（1～3）》（2018～19），《习近平的原点和“红色基因”——对毛泽东、邓小平的继承、超越（1～2）》（2019）之后，进一步探索现代中国历史上形形色色的天数、天机乃至天意。

本系列的新意除了之前论文未提及的大量例证外，更在于联系节气审视政治气候，以某些出现频度高的特定日期为轴线纵横扫描历史，并从党、军、国的 100 周年等节点引出“10 年浩劫”最疯狂时期的干支 1 轮后的“红羊劫”（丙午、丁未年，2027～28），提示有待警惕的异常变局。

（夏　刚，立命馆大学国际关系学院教授）